
僕は僕だから僕なんだ

深雪林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は僕だから僕なんだ

【Nコード】

N3296Y

【作者名】

深雪林檎

【あらすじ】

ハーフで可愛らしい外見を持つ男の子と、転入生の美少女のお話です

分類は学園青春ドタバタラブコメディーってところでしょうか
一応Hなシーンも入る予定です。そこまで過激な描写を書くつもりもありませんが？笑
作者の自己満足的かつ初めて執筆するので、温かく見てやって下さい

一応、毎日更新する予定です

できれば感想なんかをくだると、とても喜ぶ作者だったりしま
す

第1話 転入生

高2の春、始業式の翌日。

時刻は8時38分。

朝のホームルームギリギリの時間。

「やあ、ミリー」

自分の席に着くと左隣の席の無駄に爽やかな青年、神崎 心が声を
掛けてきた。

「おはようございます、心」

誰にでも敬語を話す、それが僕 雪村・A・ミリオネーゼの特
徴である。そしてハーフで髪はアッシュブロンド（学校では黒髪の
ウィッグ）である。

「相変わらずミリーは可愛いなあ」

「僕は男です。気持ち悪いので止めて下さい」

心は見た目は超が付くくらいの美形で長身、スタイルも良く運動神
経抜群なくせに性格が子供っぽい。普段からこんな調子なので僕は
呆れて返す。

僕は小柄だが運動もかなり出来るし、顔も…不本意ながら心と違う
方向で美形だ。

「はいみんな席に着いてー」

教室の扉を開けて担任の島田先生が入ってくる。

「HR始める前に転入生を紹介するわよー」

（転入生？始業式の次の日に？）

担任の発言に訝っていると、教室中がざわついているのに気が付いた。確かに普通に転入生が入ってくるだけでもそうなるだろう。ざわつく生徒を気にせず担任が転入生を教室に入るように促す。

「「「おおーっ！」「」」

「「「キヤーツ！」「」」

途端にざわつきが歓声に変わった。

僕は席が一番後ろで小さいから、転入生を見る前に前の奴が立ったので見えなかった。

「あ、なるほど」

思わず口にした。

背中まで伸びる綺麗な髪、細くて長い手足、少し凜とした整った顔立ち。

「へーあの娘も可愛いなあ。ミリと良い勝負だね」

左隣からなにやら聞こえたけど、無視しておこう。

「じゃあ自己紹介お願いねっ」

担任の進行でざわつきも収まる。

「柊 燈加ひいらぎのあかりです。よろしくお願ひします」

小さいが澄んだよく通る声で言った後、礼儀正しくお辞儀した。

途端にまた歓声とも絶叫とも言えそうな爆発音が教室に響く。

「はいはい、うるさいわよ。じゃあ柊さんあいてるところ適当に使ってね」

手を叩き生徒を黙らせて、適当に席を決める。

まあ始業式に席替えを（勝手に）して、あいてるところは一番前の3つしかないけど。

柊さんは何故か何かを探すように教室を見渡して、僕を見て止まった。

「?」

僕が不思議がっていると、柊さんは僕に指を指して言った。

「あの男の子の隣がいいです」

「であるからこの数式を……」

前の黒板に書き込みながら数学教師が説明している。

一限目だというのに僕はすごく疲れている。

右隣には姿勢良く授業を聞いている柘さん、一番前には鈴木（だっ
たっけ？）君が。

柘さんの発言からの流れを簡単に説明。

柘さんが心に交渉

心が（駄々をこね）交渉失敗

反対側の鈴木（仮）に交渉

鈴木（仮）が断る

クラス中が鈴木（仮）に大ブーイング

鈴木（仮）が泣きながら一番前の席へ

鈴木（仮）君が可哀想だった。

後で謝っておこう。なんとなくそうしないといけない気がする。

それにしても何で僕の隣がいいなんて言い出したのだろう。

あの（席を奪った）後クラスみんなが質問責めにはしていたけど、
それについては「特に意味はない」と答えていた。

「今日はここまで。ちゃんと予習復習しておくように」

考えているうちに授業が終わり、休み時間は相変わらず柊さんは質問責めで、一度も話すことなく午前中は終わった。

昼休み僕はいつものメンバーと屋上昼を取っていた。

「ミリーの隣の女、誰だよ？初めて見るけどよ」

購買のパンをかじりながら聞く間宮 凌^{まみやりょう}。金髪でピヤスを付けたこの辺一帯の不良のトップだが、実際は気さくな奴。ちなみに僕の前
の席だが午前中は爆睡（教師は黙認）のため全く知らない。

「転入生の柊 燈加さんですよ、凌さん」

答えたのは桐生 茅依^{かづゆい}ちゃん。僕よりもさらに小柄で髪の毛を左右の耳の上で縛っている、おとなしくて可愛らしい女の子。

「今更そんな質問なんて相変わらず抜けてるね、君は。」

笑顔でからかう稲嶺 来人^{いなみねくると}。人間観察と情報（弱み）収集が趣味な腹黒いメガネの男。本来、屋上の出入りは禁止だが、教頭に交渉（脅迫）して鍵を借りたらしい。

「凌ちゃんらしいけどね」

そして心に僕、それから

「玲はまだ帰ってきませんね」

伊波 玲はジャンケンで負けて飲み物を買ってきてもらっているのだ。

「私ちよつと見て来ます」

「あんなのほつとけつて」

茅依ちゃんを凌が止める。凌は玲が苦手なのだ。

「あんなので悪かったわね」

「げつ」

屋上の入り口に飲み物を抱えたショートヘアにリボンがトレードマークの玲がいた。それから…

「あつ、終つちじゃん。どしたの?」

「ここに雪村君がいるって聞いたから、伊波さんに連れてきてもらったのよ」

玲の後ろにいた柊さんが笑顔でまた僕を見て言うてくる。
また僕の名前を出すの？
綺麗な人からそう言われるのは嬉しいけど、なんで僕に？

「ミリーが？」

横で玲と言いつ争っていた凌が話に入ってくる。そして柊さんの言葉で来人の眼鏡が光ったのを僕は見た。

「はい、雪村君が」

「僕に何か用ですか？」

「いえ、特には」

「…えと、とりあえず一緒に昼でも如何ですか？」

「はい、頂きます」

笑顔で僕らの輪の中に入ってくる。
何だか頭が痛くなってきた。

第2話 嫌な予感（前書き）

後書きにプロフィールを簡単にまとめました。登場人物が増えてくるとまた書くと思います。

第2話 嫌な予感

結局、昼はいろいろ質問したりされたりして終わった。

隣の席にもかかわらず柊さんと初めて直接話したが、やっぱり綺麗な人だった。よく笑うし、みんなともすぐ打ち解けたようで玲や茅依ちゃんとなんかは、下の名前で呼ぶようになっていた。

その後は特に何かあるわけでもなく、柊さんは学校が終わるとすぐ帰って行った。

「さて、僕も帰りますか」

心はテニス部、玲はソフトボール部、茅依ちゃんは手芸部でそれぞれ忙しいし、来人は生徒会でいない、となると

「凌、起きて下さい。帰りましょう」

肩を揺すって起こす。

起こさなかつたら、多分ずっと寝ているだろうし、おそらくいつものメンバー以外で凌を起こせる程の勇気を持ち合わせている人は少ないだろう。

「ああ、ミリーか。もう放課後か？悪いけど今日は『店』に行くんだよ。一緒に来るか？」

大きく伸びをして、首を鳴らしながら聞いてくる。

その音に教室に残っていた生徒は過剰に反応して畏縮していた。やっぱり起こせないよな。

「今日は早く帰りたいので遠慮しておきます。みんなによろしく伝えてください」

「そうか。起こしてくれてサンキュな」

鞆を手に教室を出て行く。

タイミングの悪いことに、ちょうど教室に入ろうとした男子生徒が飛び退いて道を空ける。

「今日は一人で帰りますか」

僕も鞆を持って教室から出る。男子生徒はまだ床にひっくり返っていた。

凌の言う『店』というの要するに凌の仲間たちの溜まり場だ。ひよんなことから関わって凌と親しくなったが、まあ詳しい事はまた行く機会にでも。

僕の家は学校から電車と徒歩で30分くらいのところにある。道中、僕は柘さんのことを考えていた。

隣の席に来た事、特に用もないにも関わらず会いに来る事、始業式の翌日に転入してくる不自然な事。

まあ、それさえ気にしなれば他は全然普通というより、普通より全然綺麗な人だし笑顔が可愛いし、話してても楽しいけど。質問を聞いていて分かったことは

- ・親の仕事の都合で急に引越す事になったこと
- ・学校の近くに部屋を借りる事になったこと
- ・趣味は読書と料理、洗濯、掃除
- ・好きな食べ物、血液型、誕生日、好きな教科 e t c .

僕の事については何も答えなかった。考えているとすぐに家に着いた。

「ただいま帰りました」

中に入り、いるであろう父親言う。そして暑苦しいウィッグを外して髪を整える。相変わらず肩まで伸びる綺麗なアッシュブロンド。学校では隠しているが実は自分では気に入っている。

「やあ、ミー君おかえり」

リビングに入ると父親の庚紫こうむらが声を掛けてきた。純系日本人、黒髪、専業主夫。

「話があるけど良いかな？」

「何ですか？お父さん」

聞き返すと椅子に座るように促される。

「実はねミー君、明日から父さんはマリアさんの仕事の手伝いをしに行こうと思っているんだ。ほらマリアさんって仕事以外何も出来

ないでしょう？だから身の回りの世話とかそういう形で手伝ったり、たまには無理にでも休ませたりしないかね」

マリアというのは僕の母親で世界でもトップクラスのIT会社の社長で、ここ何年も帰ってない。だから今まで…というより交際当初かららしいが、家事は全て父親がやっている。

確かに僕の母親は仕事にかまけて他の事を何もしないから確かに行った方が良さのかもしれない。でもいきなり明日からって。

「僕はどうすればいいんですか？」

「ミー君が付いてきてくれるなら父さんも嬉しいけど、ミー君はこっちの暮らしの方が良いだろう？ミー君は日本に残って暮らしなさい」

「確かにそうですけど、いきなり1人暮らしはいくらなんでも…」

「一応家事全般は出来るが、さすがにきつい。」

「それについては問題無いよ。手は打ってあるから。もう5時半か。ちよつどいいかな？ついておいで」

「どついついことですか？」

「来れば分かるさ」

そうして車で連れてこられて、七階建てのマンションに着いた。

「どうだ？オートロック付き、3LDKだ。学校からも歩いて5分だぞ。今日からここに住むんだ」

「ですから、1人暮らしは…」

「話はここからだ。まあ入って」

三階の部屋に入る。ワンフロアに一部屋しかないらしい。

入ると何故かいい匂いがした。僕の好きなビーフシチューの匂いだ。部屋の中はもうすでにテレビやソファなどが用意してある。

「おお、良い匂いだね。ミー君、今日からはこの人と暮らすんだ。

家事は全部やってくれる。仲良くやりなさい」

台所から『その人』を呼ぶ。

嫌な予感がした。

というより今したわけでもない。ある程度早い段階で予感はしていた。まず、親の仕事で引越す・引越し先は学校の近くという聞き覚えのある設定。昼に聞かれた好物の匂いがこの部屋にすること。不自然なタイミングで現れ、不自然に干渉する人物。

『その人』が台所から出てくる。

「よろしくね。雪村君」

嫌な予感というものは大概は的中する。『その人』はもちろん終
燈加だった。
頭がまた痛くなってきた。

第2話 嫌な予感（後書き）

登場人物のプロフィールを簡単に紹介します

雪村・A・ミリオネーゼ《ゆきむら》

- ・ 11月1日生 16歳
- ・ 身長 158cm
- ・ 体重 45kg
- ・ 趣味 散歩、料理
- ・ 苦手 特になし
- ・ 運動 A
- ・ 勉強 A
- ・ 特徴 敬語、可愛い容姿、アッシュブロンドの髪、ハーフ

神崎心 かみさきしん

- ・ 8月13日生 16歳
- ・ 身長 182cm
- ・ 体重 75kg
- ・ 趣味 スポーツ
- ・ 苦手 テスト
- ・ 運動 A+
- ・ 勉強 E
- ・ 特徴 イケメン、天真爛漫、テニス部

間宮凌 まみやしょう

- ・ 10月17日生 16歳
- ・ 身長 185cm
- ・ 体重 78kg
- ・ 趣味 ビリヤード
- ・ 苦手 伊波玲
- ・ 運動 S
- ・ 勉強 E-
- ・ 特徴 金髪、ピアス、不良

稲嶺 来人
いなみねくると

- ・ 9月25日生 16歳
- ・ 身長 170cm
- ・ 体重 58kg
- ・ 趣味 人間観察、情報（弱み）収集
- ・ 苦手 不明
- ・ 運動 B
- ・ 勉強 S
- ・ 特徴 眼鏡、生徒会、腹黒い

伊波 玲
いなみあきら

- ・ 3月5日生 16歳
- ・ 身長 162cm
- ・ 体重 47kg
- ・ 趣味 運動、天体観測
- ・ 苦手 虫

- ・運動 A
- ・勉強 C
- ・特徴 明朗活発、ソフトボール部、リボン

桐生 茅依きりゆい

- ・1月30日生 16歳
- ・身長 152cm
- ・体重 40kg
- ・趣味 読書、料理、裁縫
- ・苦手 怖い人（凌はOK）
- ・運動 D
- ・勉強 A
- ・特徴 温和、ツースайдアップ

柊 燈加あけい

- ・4月30日生 16歳
- ・身長 170cm
- ・体重 55kg
- ・趣味 読書、料理、洗濯、掃除
- ・苦手 不明
- ・勉強 S
- ・運動 A
- ・特徴 背中まで伸びるストレートヘア、整った顔の美少女

- - おまけ - -

鈴木（仮）《すずきかつこかり》

- ・身長 172cm
- ・体重 60kg
- ・勉強 C
- ・運動 C
- ・苦手 柊燈加

島田 真美 しまだまみ

- ・身長 169cm
- ・体重 57kg
- ・担任 二年B組
- ・教科 国語
- ・彼氏いない歴 26年
- ・年齢 もちろん26歳

雪村 庚紫 ゆきむら ちかむら

- ・身長 175cm
- ・体重 62kg
- ・趣味 家事全般
- ・特徴 黒髪、専業主夫
- ・年齢 42歳

第3話 同棲

長い綺麗な髪を指で左耳に掛けて、スプーンを口に運ぶ美少女の柊さん。

そんな仕草を見ていると目があつて

「雪村君、おいしい?」

「はい、とてもおいしいですよ」

柊さんが笑顔で聞いてくる。

父親が「飛行機の時間だから」と言つて早々に去つていき、柊さんが「とりあえずコレ食べようか?」と照れ笑いしながらビーフシチューを出してくれたのでおとなしく従つていただいている。

「そろそろ、説明していただけますか?」

父親はほとんど説明もせずに行ったので、現状がいまいちよく分からない。柊さんから説明してくれそうにも無いので、我慢出来ず僕から尋ねる。

「もう、食事中にお喋りするのには行儀が悪いんだよっ」

「…最初に話しかけてきたのは柊さんです」

柊さんは膨れっ面でたしなめてきたが、僕は全く表情を変えず返す。

「ほんとに、可愛い顔してるくせに性格は全然可愛くないんだから。それから敬語似合わないから止めた方がいいよ?」

「余計なお世話です」

ほんとに余計なお世話だ。僕は敬語しか使わない。そう誓ったんだ。他人にとやかく言われようが、これだけは変えない。いや変えられない、変えてはいけないんだ。

「でもその髪は似合ってるね。学校でも隠さずに行けばいいのに。勿体無いよ？」

「っ!！」

しまった!!一度家に帰ったから油断していた。慌てて隠そうとする、が無駄な努力だと諦める。

「どうでもいいですから、早く説明してくださいっ」

ついその焦りを誤魔化そうと強い口調になってしまった。

「そんなに急かさなくてもいいじゃない。えーと、じゃあどう話そうかな?なんかちよつど良い言葉が…」

話をまとめるように俯いて考え込んでいる。学校での性格と全然違って表情がコロコロ変わる。猫をかぶっていたのか。

「うん、簡潔に言った方がいいよね」

手を叩いて顔を上げる。どうやらまとまったらしい。

「同棲します!！」

飛びつきりの笑顔で断言した。

「…帰ります」

立ち上がり玄関に向かう。

「ちょ、ちょっと待ってよ。何で!?!」

慌てて柵さんが追いかけてくるが、相手にしない。

父親からの少ない言葉で予想はしていたが、これだけ堂々とあえてその単語を言われて「分かりました」なんて言えるか。
1人暮らしてもなんでもしてやる。

「ちょっと雪村くん!」

「大体荷物もないのにこんなとこ暮らせませんよ」

何も説明されずに連れてこられて、手ぶらなのだ。

「そつね、そろそろ来る頃かしら」

時計を見てなにやら呟く、と同じくらいにインターホンが鳴る。

「はい」

スリッパをパタパタと鳴らし僕を通り越して玄関に向かう。

そして柵さんが扉を開けると、中に入ってきた運送屋数人によって、ダンボールがバタバタと玄関に積み上げられていく。

「はい、これで全部です。ここにサインお願いします。あ、ご依頼

通り残りの家具や家、土地は売却するように手続きが済みま
したので。では失礼します」

「ご苦勞様です」

それだけ言い残して運送屋は去っていく。柗さんにはこやかに手を振っている。そしてこっちに振り向いて

「はい、雪村さんの荷物よ。聞いての通り家は売っちゃってもう無いから」

「なっ!?!」

なんて用意周到な。お父さんの仕業か？
ていうか僕の意味は!?!人権は!?!

「諦めてここで暮らすの。分かった?」

勝ち誇ったように言ってくる。

「その前に、柗さんは一体何者なんですか!?!なんで僕と暮らすんですか!?!」

「そんな細かい事どうでもいいじゃないの。雪村くんがここで暮らす、私がお世話する、ついでに暮らす。たったそれだけのことじゃない」

それがどうしたの?と言わんばかりに笑って答える。

「それが一番問題だって言っているんです!?!」

何でクラスメートの異性、しかも正体不明の人と暮らせるんだよ。いくら何でも色々と問題があるだろう。

「何？雪村くんもしかして変な事考えてない？うわーエッチ」

「考えていませんっ！！」

な、何を言い出すんだこの人はっ！！

「なら全然平気だねっ」

悪戯っぽく笑ってくる。

どうやら決定事項なので諦めるしかないようだ。

「…もういいです。いいですから柊さんがどういいう人なのかだけでも教えて下さい」

「うーん」

またしても考え込む。

「まあ、マリアさんの知り合いつてところかな。んでマリアさんに頼まれたの」

「お母さんに…っ？」

「うん、日常生活から学校生活までちゃんと見てやってっつてね。と言っつわけでこれからよろしくねっ」

またまた頭が痛くなってきた。

今日だけで何回目だろうか。

そんなこんなで、グダグダのうちに僕と柊さんの同棲生活が始まっ
てしまった。

第3話 同棲（後書き）

えー、いろいろと書くのが大変になってきました。

キャラの性格がうまく書き分けられず、何だか矛盾したりしそうです（汗）

登場人物が増えたりするともうパンクしそうかもです。

もともと作者のポケャブラリーは少ないので、

「ふ、初心者がww」

と笑って見守っていただけるといいです。

柘燈加について最初は性格がいまいち掴みづらいようにしているつもりです。

まあ、ミー君が生活に慣れてくるにつれて分かってくるのではないでしょうが。

主人公のミー君については、小さくてかなり可愛い外見の設定ですが、敬語なのでそんなイメージがあまりないかも？（作者は自分で書いて思います）です。

作者の言葉足らずなせいかもなので、伝わりやすいように努力していきます。

見ていただいた方へ、出来たら感想なんか欲しいなあ…なんて欲張りな作者です。

指摘なんかもしていただけたら、ぜひ活用させていただきます。ぜひぜひ一言よろしくお願いします。

第4話 起床・登校（前書き）

点線より下も一応本編です。

読めば分かりますがミー君視点ではありません。

「……………はい、それは予定通りです。……………ええ、もちろん。でも話に聞いた以上に深刻でした。あの時の事が相当ショックだったんですね。……………大丈夫です。でもやっぱり私のせいですから、私がなんとかします。……………ありがとうございます。……………ええ、それじゃあ……………はい、こっちは夜中です……………ふふっ、おやすみなさいマリアおは様」

携帯電話から通話が切れた音がすると、パタンツと閉じる。
空を見上げると、星空が広がっていた。
時刻は12時30分。

「あっちはもう朝だもんね」

大きく伸びをして、ベランダから部屋の中に入る。

そしてミー君の部屋に近づくとドアをそっと開けて中を覗く。
ミー君はぐっすりと眠っていた。

「ふふっ、相変わらず可愛いなあ。おやすみなさい、ミー君」

開けるときのと同じように起こさないようにドアを閉める。

第4話 起床・登校

朝。中途半端に目が覚める。

起きてるけど起きてないような、意識が不安定な状態。無意識のうちに寝返りをうつ。

何か暖かくて、良い匂いがするものにぶつかった。

そして顔には柔らかいものが当たっている。

(何だろう?)

それが何か気になって手で触ってみる。

何だかマシユマロみたいにフニフニしている。

「やつ…んっ!?!」

頭の上から何か聞こえるので、顔を上げて目を開けてみる。

「ミー君ったら…えっち」

顔を赤らめた美少女がいた。

「っ!?!」

眠気が一気に吹き飛んで、飛び起きる。

燈加さんはゆっくりと起き上がって、笑顔でこっちを見ている。

「ミー君、おはよう」

「おはようじゃないですよ!?!何してるんですか!?!」

「本当は起こしに来ただけで、ミー君の寝顔が可愛くてつい一緒に横になっちゃった。ごめんね」

悪びれた様子もなく笑って謝る。

「でも、ミー君の方こそ何してるのかな？」

「うっ！！」

寝ぼけていたとはいえ、微かに覚えている。

「すみません」

「あはは、いいよ気にしてないから。でもミー君がしたいなら、してもいいよ」

「しませんっ！！」

何で朝からこんなに疲れるやりとりをしないとイケないんだ。ため息が出る。

結局昨日はダンボールの中身の片付けに手間取って（燈加さんが邪魔したため）夜遅くまでかかってしまった。
中途半端にしておくのが嫌なのだ。

そういえばお互いの呼び名のことだけど、燈加さんの強い要望（我が儘）でこうなっている。

さん付けなのは僕が決めたけど。

燈加さんはしつこく食い下がってきたがとうとう諦めた。

今はダイニングで燈加さんが作った朝食を食べている。

トーストと目玉焼き、ウインナー、サラダにスープと簡単な定番だが料理が趣味なだけあって中々おいしい。

「どごミー君、おいしい?」

「はい、とてもおいしいですよ」

聞かれたので答える。

すると燈加さんが不満げに

「もっつ、昨日と同じ反応。もつと感想とかないの?」

確かに昨日のビーフシチューの時もそう返したような?

「おいしいものはおいしいので。素直な感想だと思いますよ」

「そうだけど、もつとごう」おいしいつ、これは!? 隠し味にカエルの目玉が入っているね?」とか無いの!」?

「…入ってるんですか？」

燈加さんのサラツと言った言葉に冷や汗をかきながら箸を止める。

「いや、入ってないんだけどね」

「そうですね、安心しました」

と言いつつも、目玉焼きを半分に割って中を確かめる…大丈夫そう
だ。

「「ごちそうさまでした」

食べ終わって食器を洗い場に持って行く。

「あ、ミー君。皿は私が洗っておくから学校に行く用意なさい」
そういう燈加さんはもうすでに制服を着ていたから済んでいるのだ
ろう。

「わかりました、お願いします」

時刻は8時5分。昨日父親が学校から5分と言っていたから、まだ
余裕はある。

顔を洗って、歯を磨き、着替え、荷物を確認し、最後に忘れずにウ
ィッグを付ける。

時間を見てもまだまだ余裕があるのでリビングのソファでまった
りしながら室内を見渡す。

子供2人で暮らすには広すぎる。

僕と燈加さんが一部屋ずつ使ってもう一部屋は使っていない。

そして靴から通帳を取り出す。昨日まで小遣いとして振り込まれていたものだ。

――残金 515,288 円

月に5万円。それが僕の小遣い。母親が一流企業の社長のため、無駄に多い小遣いが与えられている。

高校生が使うには中々多すぎるのではないか。僕自身あまり使わないから（これでも使った方だが）貯まっていってしまう一方だ。

この部屋の家賃も多分高いだろう。下手するとこの部屋、最悪このマンションごと買い取っているのかもしれない。そういう親だ。

父親がいなくなったから、多分食費だのなんだのでまた無駄にお金を振り込まれているに違いない。

学校帰りに記帳しておこう。

「ミー君そろそろ出ないと遅れるよ。置いてくよー？」

玄関から燈加さんが声を掛けてきたので、立ち上がって玄関に向かう。

「…もしかして一緒に登校するつもりですか？」

靴を履いて待っている燈加さんに聞く。

「当たり前でしょ？」

「人に見られたらどうするんですか？」

「見られたら困るの？」

「当たり前です」

そう言つて先に出る。後から慌てて燈加さんが付いてくる。

学校まで5分と近いが、駅と反対方向で大きな道から外れた道にあるので生徒は見当たらない。

結局、燈加さんは無理やり横に並んできて、一緒に登校する羽目になった。

「おはようございます、ミー君…と燈加さん？」

校門の所で僕よりも小さくて可愛らしい茅依ちゃんが声を掛けてきた。

燈加さんと一緒にいるのを不思議に思つたらしい。

「茅依ちゃんおはよう。燈加さんとはそこでたまたま会つたから一緒に来たんだ」

僕はあらかじめ決めておいた言い訳をする。

燈加さんにも話を合わせるように言っている。

「おはようございます、茅依さん。ミー君の言うとおりなの」

ちゃんと合わせてくれたようで良かった。もしかしたら本当の事を言うんじゃないだろうかと不安だったのだ。

「そうなんですか。(いいな、私も一緒に登校したいな)」

「ん？何か言った？」

後の言葉が小さくて聞き取れなかった。

「な、何でもありません！早く教室に行きましょう」

なにやら慌てる茅依ちゃん。小動物みたくて可愛い。
僕らは教室に向かった

第4話 起床・登校（後書き）

うまいこと話をまとめられない作者です。

大まかな話だけが決まっただけでも、細かい所で矛盾したり、苦勞することが多いですね。

とまだ話の序盤ながら思う私です。

最後まで書けるか、と今更ながら不安になる今日この頃。

1日1話くらい更新したいという我が儘な私。

他の事に手が付かなくなる私。

人生嫌なことばかりですね。

深い意味はありませんが。

何となく思った次第で。

それなりに人生楽しんじゃってますし。

死にたいとも生きたいとも特に思いません。

ただ、何となく生きて結果的にそれなりに楽しめています。

人生楽しんだ者が勝ちだ。

大いに同感です。まあ、でも結局はお金ですよね。

お金があれば勝ち組ですよね。

お金の価値プライスレス

そのためには勉強、仕事ですよね。

楽しんでてもお金は飛んでいくだけですよね。

結局は頑張った物が勝者なんですよ。

どうせ作者は負け組ですよ。

ここでふと過去の散財を思い出す私。

皆さんは1日でどれだけゲーセンにつき込んだことがあるでしょうか。

私は…言いたくありません。

言い出しといてなんですが(汗)

まあとにかくお金ですよ。お金。

人生はお金なんですよ。

この後書きを書いている間に夕飯を食べました。

モツ鍋でしたよ。寒いときは鍋ですよ。鍋は良いですね。

あと暑い日にクーラーをつけて寒くして、布団を被ってアイスを食べたりするのを、私は大好きですね。

その逆もアリですね。

まあ、なんだかんだで変わった私です。

後書きなので好きなこと書きちゃえ、と思ったので、意味もない文がここまで続いております。

今更な話ですが、特に意味のない後書きなので、読まなくていいです。

読んでしまった人、「時間を返せ」と言われても困ります。

次話を頑張るので期待して下さい、としかお詫びできません。

それでは、また明日(だと良いなあ)の更新をお待ち下さい。それ

では。

第5話 いとこ（前書き）

ちなみにミー君の通っているのは天鐘学園と言うところでクラスは二年B組です。

特に重要でもないですが学園紹介

勉強よりも部活動や生徒の自主性、社会性を向上させようという教育方針。

なので、体育祭だとか文化祭、その他色々な行事は普通の規模ではない（予定）。

授業なんて殆ど潰しちゃいます。

ちなみに心と玲はスポーツ特待生。

だから授業風景はあまり書かないつもりです。

授業風景の描写を取り入れるのがめんどくさいとかいう作者のため
の後付け設定ではありません（笑）

建物はまあ普通ですね。

グラウンドとか体育館、テニス場や室内プールなどの設備は充実しているとは思って下さい。

まあそんな感じで終わり（適当）です。

第5話 いとこ

「バサッ」

燈加さんが下駄箱を開けると何枚かの紙が落ちてくる。もちろんラブレターとか言うやつだ。

ちなみに僕と茅依ちゃんの下駄箱にも何枚かずつ入っていた（何故か男子から）が、燈加さんのは下駄箱に収まりきれないくらいあったらしい。

「はあ」

面倒くさそうに束ねて玄関のゴミ箱に捨てに行く燈加さん。

僕のは何故か茅依ちゃんが「処分しておきますね」と言って取っていった。

「読んであげないんですか？」

燈加さんに聞く。彼女ならそういう類のものは読み飽きているだろうが。

「興味ないわ。早くしないと遅刻よ」

笑いながらそう言ってさっさと教室に行くこととする。

僕と茅依ちゃんもそれに続いた。

「ミリー、飯を買いに行くぞー」

昼休みになるとすぐに心に声を掛けられる。僕たちのメンバーの男子はみんな購買派なのだ。

ちなみに朝、燈加さんが弁当を作ると言ったが断った。一緒に暮らしていることがばれるかもしれないからだ。

「分かりました。ちょっと待って下さい」

来人が玲に教頭から借りた（脅し取った）屋上の鍵を渡し、僕が凌を起こして購買に向かう。

燈加さんは玲と茅依ちゃんに連れられて一緒に屋上に行った。

「それにしても、終つち昨日と全然性格ちがわない？」

「そ、そうですね」

道中に心が聞いてくるので僕は苦笑しながら相づちをうつ。

昨日は授業中でも休み時間でも、大人しくしていたが、今日は本性を現していた。

しかもそれでもすぐに自然に溶け込んでいるから不思議だ。

「結局、ミリーとはどうい関係だ？」

来人がいきなり核心をついてくる。
昨日は僕も心当たりがなくて、わからないと言っていた。今は分かっているが誤魔化すしかない。

「さあ？分かりません」

「じゃあ何で名前呼び合っているんだ？」

「今日の朝、途中で一緒になって向こうからそうするようになんて言われたんですよ。」

「そうか」

何かを考えているように来人は手を顎につけている。
来人にだけは絶対知られてはいけない。これまでの付き合いで分かっている。

「今日も混んでいますね」

購買はすでに人だかりが出来ていた。幸いに天鐘学園の購買は在庫がたくさんあるため、売り切れる事はめったにない。でも昼にありつくまで時間をくってしまう。

「今日も凌がいるから大丈夫だ」

ニヤリとしながら来人が凌を見て言う。

「凌ちゃん、任せたよ」

心も楽しそうに凌に頼む。

「たくつ、めんどくせえ」

そう言いながらも凌は人ごみに近づいていく。

そして前に掻き分けて入ろうとする一番後ろの男子生徒の肩を掴んで

「おい、邪魔だ」

声に凄みをきかせて威嚇する。

「ひいつ！？間宮さん！？」

（えっ！？間宮凌！？）

（馬鹿！！死にてえのか！？さん付けしろっ！！）

（邪魔だどけ！！）

「ぶぎゃっ！？」

（早く道開けろって！！）

（死にたくないよー！！）

（押すなって！目を付けられるだろ！！）

（うるさいぞ！！死にたくないやつは黙ってる！！）

その存在はすぐに知れ広まって、購買まで一直線の道ができる。

ちなみに凌が最初に声をかけた男子生徒は鈴木（仮）だった。

今は騒ぎに巻き込まれて情けない声をあげて後ろの方で気絶している。

「相変わらずすごいですね」

「さすが凌ちゃん！」

「いいから早く買ってこい」

こうして手早く昼食を手に入れた僕らは屋上に向かった。

「あ、早かったですね」

「もう少し待っててね」

「ほらヤンキー、『待て』だ。ついでに『お座り』」

茅依ちゃんが持参のシートを広げている。

それを手伝う燈加さん。

何もせず笑いながら凌を挑発する玲。

「殺す」

「」「落ち着け(いてください)」「」

殴りかかろうとする凌。

それを全力で止める僕たち。

「どうしたヤンキー？『待て』も出来ないのか？やれやれとんでも

無い駄犬だな」

更に凌を挑発する玲。

両方の手の平を上にして首を振って、溜め息をつく。

玲、頼むからもう勘弁してくれ。

必死に凌を止めながらそう思う。

何だってそんなに挑発するんだ。

凌がひと暴れして落ち着いた所で昼食を食べ始める。

階段のある壁が崩れて骨組みしか残ってないが、来人が「(教頭が)何とかしておく」と眼鏡を触りながら言っていたので大丈夫だろう。

玲もこれ以上凌を挑発する気も無いようでありあえず安心

「燈加って、ミリーとどういう関係なの？」

と思ったら食事中に玲が突然質問を切り出す。

「ゲホゲホ」

僕は購買のパンを喉に詰まらせる。

茅依ちゃんが飲み物を出してくれたので、それで流し込んで礼を言う。

「昨日から気になってたんだけどさ、教室で質問しても答えないから、ここでなら答えてくれるかなー、ってね。で、どうなの？」

なおも追求する。

燈加さんは一瞬僕を見て「大丈夫」というようなアイコンタクトをしたので、僕はとりあえず様子を見る。

「なんて事ないわ。ただ一夜を共にしたってだけの…」

「いとこ！！そう、実はいとこだったんですよ！！」

燈加さんの問題発言を誤魔化そうと大きな声ででまかせを言う。

「変な事を言わないで下さい！！」

僕は燈加さんを睨みながら注意する。

燈加さんは平然な顔をして笑っている。

「ごめんねー、ミー君」

絶対に反省してない。

「ならさっきそう言えばよかったじゃん」

「そうでしたね。すみません」

心が購買に向かう時の事を指摘するので適当に流す。

「やましいことがあるから隠すんだよ」

「断じてありませんっ！！」

「ミー君、そうだったんですか…」

「違いますっ！！！」

ニヤニヤしながら楽しんでいる来人と何故かしゅんとする茅依ちゃんに全力で否定をする。

燈加さんが余計な事を言うから、ややこしくなったじゃないか。

あとでちゃんと注意しておかないと。

結局、僕と燈加さんは『いとこ』ということでもみんなに納得してもらえた。

当然一緒に暮らしていることはバレてない。

何だかんだで午後の授業も終わった。

第5話 いとこ（後書き）

第4話に引き続き、キャラクター性がブレる作者です。

てかメインキャラクター以外の登場人物が少ないですね。
モブキャラの出番無しですね。

鈴木（仮）しか出ませんもんね。

個人的には好きなキャラですが（笑）

セリフが

「ひいつ！？間宮さん！？」

「ぶぎゃっ！！」

しか無いですしね（爆）

まあ名前（？）が出るだけありがたいと思って欲しいですね。

まあ、今回も特に内容のない後書きです。

本編も内容が無いよ、とか言わないでください。

と言うより読んで下さっている人が何人いらっしやることやら。はあ。

一応何人かから『お気に入り』していただいているようですが。

こんな私の駄作を読んで下さって感謝感激雨あられですよ。

最近髪の毛が伸びてきた私です。

久し振りに伸ばすのもアリかな？と思う私ですが、流石に邪魔なので切りに行こうか悩みます。

そうそう、一昨日くらいに頭皮の正しい洗い方ってのをテレビでやってましたね。
試してみましたけど、実感無しですね。
まあ続けてみようとは思ってますが。

他の作家さんのを読んで見ますが、皆さんストックなるものをお持ちなそうです。

私は貯蓄0ですよ。

いったいいつ行き詰まることやら。

というよりもう危ないですね。

後書き＝現実逃避ですね。

こんなの書いてる暇があれば本編書けてんですよ。

ただでさえ内容が薄いんだから。

タイトルですが、言いやすいように略す小説をよく見ます。

バカ スとか、は ないとかね。

作者もしてみようとか考えたんですけどね。

無理でしたね

何か良い案無いですかね？

と言うより私の駄作の場合、略してどうする？って感じですが
笑)

何か今日はいろいろあつて疲れた気がします。まだ3時過ぎですが。まあ今回もこのくらいにしておきます。そろそろ字数制限もありますので。

後書き20000字以内つてあるのに、私の携帯では1024字しか書けません(泣)

まあちようどいい制限つて事で諦めます。

それではまた明日。

読んで下さっている何人かの人がいれば、また読んでくださいね。

強要はしません。

むしろ推奨も出来ませんが。

ではでは。

第6話 柑奈

学園近くの大型スーパー。

ここに来れば一通りの物が手に入る。

僕たちは用がある食品売場の方にいる。

「ふんふんふーん」

鼻歌を歌いながら、燈加さんは必要な物を次々と僕の持つ籠に入れていく。

こうしているととても楽しげで可愛らしくて、おとなしい女の子に見えるのだが

「こうしていると新婚さんみたいだねっ」

「気のせいです」

こんな事を言い出すのでやっぱりこの人だ、と思う。

僕と燈加さんは『いとこ』という設定になってしまったので、一緒に登下校とかある程度自然に出来るようになり、こうして放課後に買い出しに来ている。

「もっつ、ミー君つまんない」

頬を膨らませて文句を言う。

つまらなくて結構。こういう人ですから。

無視して会話を進める。

「必要な物が揃ったのなら早くレジに行きましょう」

「無視しないでっ!!」

それでも構わずレジに向かう。

ここに来る前に通帳を記帳してきたが、やっぱり信じられない額が振り込まれていた。

今更ながら僕の母親の金銭感覚は異常らしい。

そのくせ父親は「安くて大売りしてたから」と何かと買ってくるよ
うな人だが。

ひと月に50万か。

何に使えというのだろうか。

働かずに年収600万円。

非常識な親もいたものだ。

呆れてため息しか出てこない。

「ミー？」

スーパーからの帰り道、そんな事を考えながら燈加さんと並んで歩
いていると、後ろから聞き覚えのある声で呼ばれた。

「柑奈？」

振り向くと中等部の制服を着た、茶髪をポニーテールにしたスレン
ダーな体つきの女の子がいた。

「知り合い？」

隣から燈加さんが不思議そうに聞いてくる。

「ええ、まあ。水端 みはなかな 柑奈見てのとおり僕たちと同じ学園の中等部で三年です。ちょっとした知り合いです」

『店』のメンバーだけど、まあ話しておくこともないか。

「あんた誰？ミーの何なの？」

僕と燈加さん、買い物袋と視線を動かして、睨み付けながら強い口調で燈加さんに尋ねる。

燈加さんはそれに特に臆することなく、平然と返す。

「柘 燈加。ミー君と同じクラスよ。ミー君とはいとこなの」

「そうなの？」

「え、ええ。そうなんですよ」

こつちに確認を求めるので合わせておく。燈加さんめ、いとこの設定をどこまで使う気だ。

「ふーん。まあいいけど。それにしてもミーってば全然遊びに来ないんだから」

上目遣いで僕を睨みながらむくれる。

確かにここ最近行ってないような気もする。

「すみません。近いうちに行きます」

「別に、他のみんなが会いたがってるだけだけだね」

そう言っつてフン、と首を横に振る。

「柑奈さん」

横から燈加さんが話しかける。

柑奈は「なによ?」といったかんじで不機嫌な顔をしている。

「良かったらミー君の家で一緒にご飯を食べませんか?」

買い物袋を持ち上げて笑顔で柑奈を誘う。

なっ!?!余計な事を。

「へっ!?!あ、はい」

いきなりの誘いに面食らう柑奈。

「ちよつと、燈加さん」

僕は柑奈から少し離れるようにして、燈加さんを引っ張る。そして柑奈に聞こえないように小声で話す。

「何勝手なことを決めてるんですか!?!」

「あら、駄目だった?」

「駄目ですよっ!?!僕は他人を家に招きたくないんです!?!」

「何で?」

「何でって…」

何でだろう…。理由が思い付かない…いや、思い出せない。考えていると頭が痛くなる。

何か大事な事があるような気がするが、駄目だ。分からない。何かを思い出しそうにはなったが…。

「とにかく、駄目なんです」

「まあ、良いじゃない。もう誘ったんだし」

「ちょ、ちょっと!!」

僕の話も聞かずにまた柑奈の所に行く。

「柑奈さん、行きましょう」

「うん…じゃなくてっ!!いつも一緒に飯食ってんのかよ?」

柑奈が聞いてくる。

まあ、そうなりますよね。

燈加さんに目で説明を求める。

「そうよ。だって一緒に暮らしてるもの」

「「なっ!?!」」

何だってこんなに余計な事ばかり燈加さんは言うんだ。燈加さんに任せた僕が馬鹿だった。

「どづいづことだよ？」

柑奈が僕の襟を掴みながら尋問する。
ちなみに柑奈の方が少し背が大きい。

「えーっと、親の都合でいと同じ…ね」

とりあえず曖昧に言うておく。

「でも、いと同じでも…」

なにやら納得したのかしてないのか、ブツブツと呟いている。
とりあえず手を話して欲しい。

「そんな事より早く行きましょう」

燈加さんが笑顔で何もなかったかのように急かす。

「「そんな事じゃない（ありません）っ！」「」」

何だか燈加さんと会ってから疲れる事ばかりだ。

結局、柑奈も来ることになっているし。

それにしても、僕は何を思い出しそうになったのだろうか。

第6話 柑奈（後書き）

今日もちゃんと更新できました。

ついでに新しいキャラも出ました。

名前がミカンとバナナなのは作者の遊び心ですよ（笑）

そんなわけで後書きです。

アクセス解析つてやつですか？

昨日まで（4日間）で合計500ちよいくらいありましたね。
作者はとっても嬉しいです。

お気に入りに入れて下さった人も5人もいるそうです。わーい。
こんなの私の作品でも気に入られると嬉しいですよ。

コホン。字数が足りなくなる前に柑奈のプロフィールを軽く紹介し
ましょうか。

みはなかな
水端柑奈

- ・ 5月5日生 14歳
- ・ 身長 160cm
- ・ 体重 46kg
- ・ 特徴 茶髪、ポニテ、細身

以上!!

さーて、後書き再開です。

ぶっちゃけ、プロフィール要りませんね（笑）

まあ軽くとちゃんと前置きしたのでこれくらいが妥当ではないでしょうか。

なんてふざけた私ですが、どうも体調がよろしくありません。最近寒くなったり、暖かくなったりするので嫌です。

あー、明日はバイトなので更新出きるか分かりません。

一応頑張ってみるつもりです。

クツ、ストックさえあれば。

バイト疲れますね。

お金の為とはいえこの私が!!

まあ、楽しいですけど。

でも疲れるんですよ。

時給 円とはいえ、大変ですよ。

はあ。

毎月50万振り込まれる通帳がほしい。

やっぱり世の中お金ですよな。

何度も言いますけど。

お金ですお金。マネー。

言い出したらキリがないので今日はここまで。

第7話 お泊まり(前書き)

今日は金曜日!!(補足)

第7話 お泊まり

「トントントントン」

キッチンからリズムよく音が聞こえる。

僕と柑奈はリビングでテレビを見て待っている。

なんだかんだで柑奈も家に来たおかげで、僕はウィッグを外せないでいる。

「皆さんは元気にはってますか？」

僕は柑奈に問いかける。

「ま、一応ね。芹蒔きんじや蒼佑そうすけなんか変わらずに五月蠅いし」

「そうですか。それは何よりです」

しばらく『店』に行っていないから、顔ぶれも変わったろっな。

「そつだ!?!」

何かを思い付いたのか、突然大きな声を出す柑奈。

テーブル越に身を乗り出して

「明日一緒に『店』に行こうよ!?!」

「明日ですか？」

「いいでしょ?」

特に用事もないし、久し振りだから行ってみようか。

「別に構いませんが」

「じゃあ決まり！！ミーが来てみんなびっくりするだろうなあ」

そんな場面を想像しているのかクスクスと笑う。

「あら、何か楽しそうね。」飯出来たわよ

そこで燈加さんから声をかけられる。

「「「いただきます」」」

僕たち3人は燈加さんが作った料理を食べ始める。

「あ、おいしい」

柑奈がハンバーグを一口食べて感想を漏らす。

「ありがとっ。ミー君はどうっ？」

「はい、とてもおいしいですよ」

笑顔で柑奈に言い、今度は僕に尋ねる。

「またそれっ！？他に何かないのー？」

駄々っ子のように騒ぎ出す。

何に不満があるというのだろうか。

正直な感想じゃないか。

「ははは、柊さんって楽しい人だな」

柑奈が笑って言う。

「ありがとっ柑奈さん。あと私の事は燈加でいいわ。私もさん付けは止めるから」

「…うん、分かったよ燈加」

「よろしくね柑奈」

お互いに笑いながら仲を深める。

女子はすぐに仲良くなれるからすごいと思う。

「」「」「ちそうさまでした」「」「」

3人で楽しく会話しているうちに食べ終わる。

時計を見ると時刻はもう8時前。

ずいぶんゆっくりしていたようだ。

「柑奈、まだ時間大丈夫ですか？」

中学生の女の子が帰るにはもうずいぶんと遅いと思う。
僕が家まで送って行かないと。

「ん？何の？」

洗い物の片付けを手伝いながら、聞き返してくる。

「もう結構遅いですよ。親御さんが心配するんじゃないですか？」

「ああ、大丈夫。ちゃんと泊まるって言ってあるから」

「はあっ！？」

泊まるって…ここに！？

何を考えてるんだ。

「あら、柑奈泊まっていくの？じゃあ寝るとこ用意しなくちゃね」

「ありがとっ燈加」

僕を無視して会話を進める2人。

燈加さんも何を考えてるんだ。

「ちょっと待って下さい！！そんなの駄目に決まってるじゃないですか！！」

「何で？」

僕の反対に2人揃って聞き返す。

「何でもです！！普通に考えて駄目でしょう！！」

「あー、なるほど」

何がわかったのか、ニヤニヤしながら僕を見る。

「ミー君、変な事考えてるんでしょ？中学生の女の子相手に。うわ、ミー君えっちー」

「「なっ!?!」」

燈加さんの発言に僕と柑奈が同時に声を出す。

何てことを言い出すんだ。

「ミー、そうなんだ。私は…別に。ミーが…したいなら…」

「違いますっ！！」

意地の悪く笑う燈加さんと顔を赤らめる柑奈に否定する。

柑奈は声がボソボソとして、後の方がよく聞こえなかったが、きつと何か勘違いしているに違いない。

「なら別に構わないんじゃない？」

勝ち誇ったように聞く燈加さん。

なんか昨日もこんなふうだったような気がする。というより絶対に燈加さんはこの状況を楽しんでいるような気がする。

「…もう好きにしてください」

ほんともう何とでもしてくれ、というよな自暴自棄になる。

「じゃあ、柑奈。その部屋使っていないから好きに使ってね。ベツドとかはちゃんとあるから」

「はい」

燈加さんの指示で荷物を部屋に持って行く柑奈。

鞆がやけに大きいからきつと、替えの着替えとかを入れてあるに違いない。

何て用意がいいんだ。

「ふわあ」

柑奈が眠たそうに欠伸する。

日付はとっくに変わっている。

「そろそろ寝たらどうですか？」

僕は柑奈に言う。

というより寝かして欲しい。

柑奈にトランプやら何やらと付き合わされて、騒いでそろそろ眠たい。

燈加さんはずっと楽しんでるようだが。

「そつだね。もう寝るよ」

「じゃあ、お休み。ミー君、柑奈」

そう言つてすぐにそれぞれの部屋に入っていく2人。
散乱したままのテーブル。

「片付けていきましょうよ」

誰に言うでもなく呟いて、ため息をつき手早く片付け、僕も自分の部屋に戻る。

電気も点けずウィッグを外しベッドに横になる。

髪を隠すのは苦労した。

先に風呂に入り、上がった後はタオルで隠し、柑奈が入っている間に急いで乾かしてもう一度ウィッグを付けた。何でこんなに苦労しないといけないんだ。

そんな事を考えていたらすぐに眠気が襲う。

ドアが閉まるような音がして目が覚める。

トイレかな？

気にしないで目を閉じる。
瞼が重い。すぐに意識が無くな…

「かちやっ」

僕の部屋のドアが開く。
寝返りをうって見る。

「!?!」

柑奈が部屋に入ってきていた。
しかもTシャツ一枚（しか見えない）で。
僕はまた寝返りをうって、反対を向く。
柑奈、何をしてるんだ!?

「!?!」

柑奈が布団の中に入ってくる。
そのまま腕を回して僕に抱きついてくる。
ちよつと柑奈!?!胸が当たってるんだけど。
足を絡めるな。

「柑奈、止めて下さい。柑奈?」

柑奈は何も反応しない。
よく聞くと柑奈は寝息をたてている。

「寝ぼけているんですか」

僕はため息をつく。

ていつか、いろんな所が当たって暖かい。良い匂いがするし。
僕は再びため息をついた。

第7話 お泊まり（後書き）

バイトで更新が遅くなるならー、バイトの前に更新してやるー
はい更新しましたよ。

昨日は2011年11月11日11時11分11秒と1が続く日だ
ったそうですね!!

まあ、あまり気にしない作者ですが。

来年は2012年12月12日12時12分12秒とか言って盛り
上がるんでしょうね。

結局はそんなもんですよ。

次に1が続く日は100年後とか盛り上がっても、別の事ですぐに
盛り上がるんですよ。

人間そんなもんですよ。

あーあ。あーあ。

気付かずに普通に過ごしてたよ。

私の馬鹿やろー（泣）

来年はちゃんとカウントダウンする。
と思う。

私のところは今日は良い天気ですよ。

昨日は雨だったけど。

晴れの日大好きです。

窓際で良く日向ぼっこします。

決してペットには譲らないポジション。

でも結局は寄り添って寝ちゃうんですよね。

今からバイトです。

疲れますね。

休みたいです。

お金だけ欲しいです。

そんな楽な話はありませんが。

ここからは割と（比較的）真面目な話ですが

本文短いですかね？

他の作家さんのをちらちらと見て思いますが、長いですよ。

私のは短いうえに中身が薄い。

どうしたものでしょうか。

中には薄味を好む人もいらっしやるのでしょうか？

次から頑張ろうかな。次からね。

でもちよつど良いと思う区切りでそんなもんなんですよね。

だいたい1話2000字くらい。

気が向いたら頑張ります。

第8話 朝【柑奈視点】（前書き）

サブタイトル通り柑奈視点です。
短いです。すみません。

第8話 朝【柑奈視点】

「まぶし…」

カーテンの隙間から光が差し込んで目に入り、目が覚めた。
今日は何だか、やけに目覚めが良いみたい。
何時だろう？

結構寝ちやったのかな？

時計を探すけど見当たらない。
それに…知らない部屋にいる。

「…あっ！」

そうだ、ミーの家に泊まったんだ。

…でも、こんな部屋だったっけ？

もう少し生活感の無い部屋だったような。

机の上や本棚を見ながら私は思う。

なんか布団もミーの良い匂いするし。

もしかしてミーの部屋？

そう意識したら顔が赤くなる。

何で！？ほんとに！？

「と、とりあえずリビングに行く」

何時か気になるだけ。

この部屋時計無いし。

「あら？おはよう。早いよね」

部屋から出るとリビングから燈加が声を掛けてきた。
リビングにある時計を見ると7時過ぎだった。

「おはよ」

「柑奈もコーヒー飲む？」

「うん。砂糖たっぷりが良い」

「ふふ、わかったわ」

燈加がコーヒーを入れに行ってくれる。

私は苦いのが嫌いだ。

コーヒーは砂糖が無いと無理。

むしろ砂糖だけで良いと思う。

燈加もそうだけど、たいていの人に笑われる。

まあいいけど。

「はい。お待たせ」

「ありがとう」

燈加が持ってきたコーヒーを一口飲む。

うん、すごく甘い。

燈加は分かっている人だなあ。

「ミー君の部屋はどうだった？よく寝れた？」

「熱っ!？」

燈加がいきなり聞いてきて、コーヒーをこぼしてしまった。
やっぱりミーの部屋だったの？

また、顔が赤くなるのが自分でわかる。

「な、何で私ミーの部屋で寝てたの…かな？」

俯いてボソボソと燈加にききかえす。

顔があげられない。

「ていうか何で知ってるの!？」

「何でって、昨日あれだけ…何でもないわ」

言いかけて途中で止める燈加。

何!? 私昨日なにをしたの!?

余計に顔を下げ、顔も多分もう真っ赤じゃないのかな。ていうか
恥ずかしすぎるっ。

「かちや」

音がして顔を上げると、私が泊まったはずの部屋から『何か』が
出てくる。

「ずるずるずるずるずる」

「…ミー？」

布団を頭から被って、床に引きずるミー…らしき物体。

そのまま洗面所に入って扉を閉める。

顔もあわせられないの!?

私ってば本当に何したのよっ!?!?

もう恥ずかしくて死にたいよ。

第8話 朝【柑奈視点】（後書き）

てなわけで柑奈視点でした。

この後はミー君視点、燈加視点で続く予定です。
いつになったら話が進むことやら。
やれやれ。

さて、高橋大輔さん、小塚崇彦さん。
優勝、準優勝おめでとございますー！！
いやーカッコいいですねー。
点数なんて圧倒的ですよ。

やっぱり高橋大輔さんのステップはすごいですね。
なんか楽しそうに滑ってますし。

私もやってみたいですね。
まあ、スケートなんて数えるくらいしかやった事ないですが。

でも作者は運動神経は結構良いんですよ！！
多分、そこそこ、人並み以上には…

長座体前屈なんか70cm軽く越えますよ！？

コホン、てなわけで作者は運動神経抜群。OK？
まあどうでもいいですが。

毎回毎回、飽きもせず良く書くやつだ
なんて思っている読者さん。
大間違いです。ネタ切れです。
ていつか疲れちゃいました。

てなわけで今日もここまで。

第9話 朝【ミ―視点】（前書き）

引き続き短いです。

前話よりも更に短いです。

想像力を働かして、読者様のお力で話を膨らましてくださいm（

）m

第9話 朝【ミー視点】

「ふわぁ」

目が覚めて早々に欠伸が出る。

ベッドに机、本棚、クローゼットetc.

一応家具はあるが、全く使われてないそれら。すぐに昨日の事を思い出す。

「そうでしたね」

とりあえず起きよう。

柑奈が『店』に行くと言っていたから早めに起きた方がいいかもしれない。

ドアに近づいてドアノブに手を掛けて止まる。

携帯の時間を見る。7時20分。

一応、念には念を入れておこう。

ベッドから布団を剥ぎ取り、頭から被る。

前が見えるように隙間を少しだけ開けておく。

再びドアノブに手を掛けて部屋から出る。

「…ミー？」

やっぱり起きていた。

柑奈から声を掛けられるが無視して洗面所に向かう。

相手をしていると面倒だ。

洗面所に入ると、しっかりと扉を締めて布団から出る。

そして顔を洗って、また急いでウィッグを着ける。

それにしても、昨日の柑奈には手を焼いた。

寝ぼけてたかと思ったら、しつこくねだってきて、僕にあんな事までさせるなんて…中学生だというのに。
ため息をつきながら洗面所を出る。

「っ!!」

リビングに出ると柑奈がいた。

別にいるのはいいんだが、わかってたし。

問題はその格好だ。

昨日と一緒の格好をまだしてるじゃないか!!

僕は柑奈の方を見ないようにする。

「ミー君もコーヒー飲むでしょ？」

燈加さんが意味ありげに笑いながら聞いてくる。

「…いただきます」

しかも昨日の事を燈加さんに見られるとは。
今日も疲れる日になりそうだ。

第9話 朝【ミー視点】（後書き）

はい、ミー君視点でした。

どうでしたか？

短いすね。

安心してください。

次話も短いす（笑）

3話分で1話にまとめれば良かったです。

でも、この間にストックなるものを作りたいと思います

あー忙しい。

何とポイントを入れてくださった読者さんがいらっしやいました！

（ハーー）ノわーい

嬉しいすねー。

ありがとうございます。

皆さんもぜひポイントを入れちゃってくださいね。

私も頑張りますので。

さあ、本文が短い分、後書きで頑張りますよ。

えー、無駄な頑張りますが。

ここは私の独壇場。

何人たりとも邪魔できぬ永遠（連載期間中）の不可侵の聖域ですよ。
ははは。

ははは…
ネタ切れです。書くことないです。
なんかないですかねー。
ヘルプミー。

あ、そうでした。

ふざけたタグを幾つか付けたんですけどね。

鈴木（仮）

気が向いたら検索してみてくださいね。
多分予想通りの結果なんで。

明日は給料日！！
特に意味はないですが。

そろそろ本文くらいの量でしょうか。
後書きの方が長いなんて、何て駄目な作者なんだろう。
もうなんか疲れちゃいましたね。
でも頑張りますよ。
頑張っても無駄なものは無駄ですが。

無駄削減で真っ先に削られますよ。

削ると言えば、
犬のオシッコを見てむしようにかき氷が食べたい作者です。
レモン味の。

早く冬になって欲しいですね。

前にも書きましたが、寒い日に暖かい部屋で冷たい者を食べる。
好きなんですよね。

それまでに楽しみは取っておきましょう。

でもですね。レモン味のかき氷でコンビニとかに売ってるよつなやつ。
つ。

そう、あれですよ。

輪切りのレモンが入ったやつですよ。

あれはいただけないですよ。

だって、輪切りレモンが邪魔なんですもん。

おいしいですけどね。

でも要らない。

そんな存在ですよ。あのレモンは

まあ、面白く無い、要らない。そんな後書きが偉そうなこと言えませんが。

アイスはでもソフトクリームが一番ですよね。

家では食べられないけど。

憎たらしいですね。

だからおいしい、というのもあるのかもしれない。

人間、簡単に手に入るものにはあまり興味を持たないものですよ。
そして、無くしてからその大切さに気づくものらしいですよ。

何てことを書いてたらもう字数制限ですね。
何てことないですね。ノルマなんか。

では皆さんまた明日読んでくださいね。
ではでは

第10話 朝【燈加視点】（前書き）

前話、前々話に引き続き、燈加視点のお話
もちろん短いですが、
すみません。

第10話 朝【燈加視点】

「……………でね、その柑奈って子が止まることになったんです。……………ええ、ちよつとは進歩するといいいんですけど。……………はい、少しは変わったんじゃないですかね？……………あつ、ごめんなさいおば様。ちよつと楽しそうな事が。……………おば様も好きですね、そういうの。ふふつ、それじゃ」

携帯電話を切る。

ベランダのガラス戸越しに中を見る。

ついさつき、ミー君の部屋に柑奈が入っていったのか見えた。楽しそうな展開ね。

そろそろ良いかしら。

少し待ってから静かに中に入り、ミー君の部屋に近づく。ドアは少し開いていた。

「んっ…もう少し…優しくして」

「本当にわがままですね」

中から2人の声が聞こえる。

えっ！？ほんとに！？

悪いこととは思いながら、中を覗く。

「！？」

ミー君はベッドの上で柑奈の……頭を撫でていた。

「いい加減寝てくださいよ」

「もうちょっとだけ、もう寝るから。寝付くまで一緒にいて」

「はあ、分かりましたよ」

なるほどね。そういうことか。残念。

私は音をたてないようにリビングまで行ってソファーに座り込む。

少ししてミー君がため息をつきながら出てくる。

「お疲れ様」

「っ!?!?…いたんですか」

声を掛けると、ミー君は予想通り驚いていた。

私は笑いながら話し掛ける。

「どう?気持ちよかった?」

「知ってて言ってるでしょっ?」

あら?平然と返されちゃった。

ま、いつか。

「柑奈はもう寝たみたいね？」

「ええ、中学生だというのにまだまだ子供ですね」

何回目かのため息をついてミー君が答える。

「でも可愛い男の娘が、可愛い女の子を寝かしつけるのって絵になるわね」

「誰が男の娘ですかっ!!！」

ミー君が小声で怒る。

そんなミー君も可愛いなあ。

男の娘。間違っでないじゃない。

もちろんそんな事は口にはしない。

「まあ、いいわ。もう寝ましよう」

「そうですね」

「…優しくしてね？」

「知りません」

「そんな！？私初めてだから激し…」

「パタン」

私の冗談も最後まで聞かずに、柑奈が使っていた部屋に入っていく。もうっ、冗談も通じないんだから。私も寝ることにした。

朝、全く覚えてない柑奈の様子を見て、からかったのは言っまでもないわね。

第10話 朝【燈加視点】（後書き）

はい、燈加視点でした。

どうでしたか？

まあ、ベタなオチですよね？

3話引きずってそれかよっ、て感じですよね。

ごめんなさい。

まあ、個人的にはR18ルートに行っても良かったんですが（笑）、予定通りにと。

さて次話は『店』に行くお話ですよ。

ようやくです。

ストックがあると一気に全部投稿したい衝動にかられますが、我慢します。

3話引きずったのも余計にあるかもしれませんが。

というか一番の原因です。

てなわけで次話サブタイトル『店』（仮）

鈴木（仮）も出るかも!？

出ません。すみません。

出したとしてもロクな扱いにはしない私です。

いつになったら本名が出るのでしょうか。

まあ私の気が向けばですが。

向く気は全くしませんが。

鈴木（仮）のキャラだけはブレない自信がある私。

その一方ブレてないキャラがない私。

なんだかんだでもう 11話。

1が続いてますよ。

次に続くのは100話後ですよ。

といつまでも古いネタを掘り起こす私。

だいたいそこまで続くのかも分かりません。

いつ挫折するかもわからない私。

次話かも？次の次かも？

見えない恐怖に蝕まれる私。

逆に創作意欲が沸いてきますね。

意外に作者はMだったりするのかもしれない。

不本意極まりないですが。

そんな作者は違う小説も書き始めようかと思っております。

まあ、こっちはバトル要素も含む感じの作品になりそうですが。

そうになると、この更新の遅れ、内容の希薄に繋がるおそれも無きに
しもあらずで。

といってもこれ以上内容を薄くしろと言われても難しい話で（笑）。

新しい方を一週ごとに更新という手も有りなわけで。

悩んでおります。

とりあえず新しい方を書き始めていたりもしていますが。

余りにもヒドい出来だと破棄するかもです。

何事も挑戦。初めてを恐れて何が出来ますか？

どうせ初めて書くなら好きなように書いちゃお。

なんて開き直るかもしれない作者。

ようするに悩んでおります。

まあ書くだけ書くとは思いますが。

その様子もこの後書きに触れるかもしれない。

作者は大まかな話の筋だけを考えて、細部は行き当たりばったりなので。

この小説も例外ではありません。

と言っても次で2つしか考えてませんが。

まあ、今日はここまでですね。

それでは。

第11話 『店』前編（前書き）

やっと『店』の話です。

新キャラも出ます。

あ、再び柑奈視点です。

第11話 『店』前編

私は今ミーと並んで歩いている。

『店』に向かっているのだ。

「今日もいい天気ですね」

「う、うん。そだね」

ミーが何気ない会話をしてくる度にどきまぎしてしまふ。

あの後、燈加が本当の事を教えてくれたのは良いんだけど、私何してんのよっ!!

そんなの全然覚えてないよっ!!

おまけにあんな格好のまままで…恥ずかしい。

「柑奈?どうかしましたか?」

近っ!?

ミーが顔を近付けて聞いてくる。

顔が赤くなるのが分かる。

「なっ、何でもないわよ!!」

私は慌てて顔を背け、ミーから離れる。

あ、でも勿体なかったかも…。

せっかくく久し振りに2人きりになれたのに。

私のバカっ!!

そんなこんなで『店』に着いた。

その辺にあるような喫茶店と同じように、なんの違和感も無く通りに建つ店。

……看板さえ無ければね。

入り口の上に掛けられた【『店』】と書かれた大きな看板。これが見事なまでに、調和とか景観とか何とかを崩してる。何度見ても変だ。

だいたい店の名前にわざわざ『』なんかつけないでいいんじゃないかな。

「さっ、入る？多分みんなもっているよ」

「じゃあ入りましょうか」

『店』に入ると、大きな鈴の音が鳴り響く……のが分かってるから静かに開ける。

「おっはよーっ」

私は思いつきり挨拶する。

ここに来るときはやっぱり元気でいたいんだ。

「うっせーよ、ガキ」

「まあまあ、そう言わないで。お早う柑奈。ミリーは久し振りだね」

「何よ芹蒔っ！！あんたにだけは言われたくないわっ！！」

相変わらず頭にくるんだからっ！！

何よ、椅子に寝転んで。

仕事しなさいよ！！給料ドロボー！！

寝ぼけた顔して！！

あ、今起きたのか。

「まあまあ、柑奈も落ち着いて」

蒼佑がなだめるように手を出してくる。

「お久しぶりです。芹蒔、蒼佑。店長はまだ来てないんですか？」

ミリーが辺りを見て聞く。

何だか「店長」のところだけ笑いながら言ったような気がする。

「店長なら……」

「呼んだか？」

未だに椅子の上に仰向けになっている芹蒔が、そのままの状態であるのドアを指さすと出て来る。

金髪にピアスの制服を着込んだ店長。

うん、相変わらず接客には出てきて欲しくない人だ。

「ミリーか。良く来たな」

「柑奈に誘われたんですよ、店長」

「……店長は止める」

「分かりましたよ、凌」

2人が笑いながら会話を始める。

そういえば、同じクラスなんだっけ？

「もうすぐ開店ですか？」

ミーが時計を見ながら店長に聞く。

「まあ一応な」

そう言っただけで店長は入り口の掛札をひっくり返しに行った。

どうせお客なんて来ないのに。

私はしょっちゅう来るけど、数えるくらいしか来たことがない。

結局は、雑談して終わるんだ。

まあ、それはそれで楽しいんだけど。

今日はミーもいるしね。

芹蒔はいなくていいけど。

一度店長に何で喫茶店なんかやってるのか聞いたたら、「趣味だ」の一言で終わっちゃった。

ちなみに、日を改めて看板の事も聞いたたら「趣味だ」でまた返された。

どんな趣味なのよ。

「柑奈ー、コーヒー」

芹蒔が相変わらずの体勢でコーヒーカップをひらひらさせながら。

「自分で入れるっ、バカ!!」

「まあまあ僕が入れてくるから」

私が怒鳴ると蒼佑が間に入ってくる。

何でこんなに人が良いのかしら。

「砂糖たっぷりなあー」

「入れてあるよ、はい」

芹蒔の要望（我が儘）をちゃんとこなす蒼佑。

「相変わらずの甘党ですね」

「当たり前だろー、糖分は良いんだぜ？それに砂糖無しでこんな苦いの飲めねーよ」

ミーの言葉に返す芹蒔。

私と同じだからなんかムカつく。
椅子を蹴っ飛ばしてみる。

「おわっ……アツツチイ!!」

バランスを崩してコーヒーを頭から被る芹蒔。可笑しくて笑いが止まんない。

「このガキ」

「あははははっ、ごめっ…ぷっふふふ、ごめんね…ははは」
笑っちゃってちゃんと喋れない。

「芹蒔、ちゃんと掃除しとけ」

店長が低い声で言う。

起こってはいない。多分店長も笑いをこらえている。
芹蒔は「何で俺が」とブツブツ言いながらタオルで体と床を拭いている

蒼佑を見ると、やれやれと言った様子で見えていて、ミィは軽く微笑んで芹蒔を眺めている。

いっつもこんな感じで過ごしてるんだ。

ここの雰囲気は落ち着く。

今日もお客さん来ないといいなあ。

私がそんな事を思いながら、伸びをしていると入り口から大きな音がする。

あ、お客。

若干テンションが下がりながら「いらっしやいませ」と言う。

入り口に立っているのは一人の女の人だった。
シヨートヘアにリボンを付けた元気そうな人。
私より3つか4つ上かな？

「うげっ」

私が案内しようとしたら後ろから、店長の短い呻き声が聞こえた。

第11話 『店』前編（後書き）

てな訳で次からミー視点に戻ります。
あんまりコロコロ視点が変わると読者様も大変だろうと思うのでし
ばらくミー固定です。

『店』に訪れた謎の客、ショートヘアにリボンの女の子。
新キャラか！？

凌の反応の訳は！？
次回、どうなる！？

とまあクオリティーの低い次回予告を書いてみたりします。
特に意味はないですね。
強いて言うなら文字数の無駄です。

一応、芹蒔と蒼佑プロフィール書いときますね。
本文では柑奈視点で書いて、ずいぶんとアバウトな紹介なので。

羽次芹蒔
はねつぐきんじ

・10月23日生 15歳

・身長 168cm

- ・体重 55kg
- ・好きなもの コーヒー（砂糖たっぷり）
- ・勉強 C
- ・運動 B
- ・性格 怠け者、面倒くさがり
- ・特徴 たれ目、長髪

すがつそつすけ
須勝蒼佑

- ・8月12日生 15歳
- ・身長 174cm
- ・体重 54kg
- ・趣味 読書、芹蒔の世話
- ・勉強 A
- ・運動 B
- ・性格 温和、世話焼き
- ・特徴 細目、細身

まあ適当にこんな感じです。

名前は読み方変えたり、並べ替えたり替えなかったりしたら、また作者の遊び心が現れます。

答えは後書きの最後に。

まあ、暇なら考えといてください。

特に面白くないですが。

はあ、今日もゲーセンに行っちゃいましたよ…

給料日だからって…自重してっ！！

それなりの収穫はありましたが。

寒いのでブランケット二枚と、暖かくなるクッション、小物数点です
ね。

引っかかっているやつをズラして落とすのって分かりますか。
グラグラしてるやつですよ。

わからなくても話は進めますが（笑）
初めて挑戦しましたけど……案外簡単でしたね。

うまくやれば3回くらいで取れましたよ（^^）

……そうやってお金が無くなるんでしょうね。

巧妙な手口です。

まだ軍資金には余裕ありますけどねっ。

数日後には泣いていることでしょう。

あーあ。

そんな感じで日々過ごす私。

はあ、お腹空いた。

何か食べよ。

最近寒いので動くのが面倒ですね。

布団にくるまりたい。

肉付けたい。

寒いんですよ。

身長・体重＝15ですよ

なかなかの痩せ型ですよ。

燃烧する脂肪がないですよ

そんなこんなで字数制限。

それではさよなら

《こたえ》

羽次芹時 宇治金時

須勝蒼佑 勝佑蒼須 醤油・ソース

sonだけです。

何度も言いますが、特に意味はないです。

第12話 『店』後編（前書き）

11話のサブタイトルをちょっと変えました

第12話 『店』後編

入り口から大きな音がした。
珍しいこともあるもんだ。

柑奈が「いらつしやいませ」と入り口に向かう。
それに続いて何故か凌が呻き声をあげる。
一体誰が来たのだろう。

僕のところからは死角で見えない。

見に行こうと寄りかかっていた壁から離れようとする、声がした。

「あ、ヤンキー？何でいんだよ。番犬か？実はなかなか優秀だったんだな」

凌に向かって即座に放たれる挑発の言葉。間違い無い。

僕の視界にショートヘアにリボンを付けた、見知った顔が現れる。

「玲」

凌に向かってそんな口が聞けるのは玲ぐらいしかいない。

「ん？ミ―までいるのか？」

玲は僕に気付いてこちらを向いて言う。

凌は……プルプルと震えて怒りを我慢していた。

昨日はキれていたが、殆どこうして我慢している。

昔2人の間で何かあったらしいが、どうしても語ってはくれない。
人間誰でも話したくない事はあるもんだ。

「何しに来たんですか？玲」

僕は尋ねる。

「何しに来たって……ここ喫茶店じゃないのか？」

「一応そうですけど……」

玲は怪訝な顔をして聞き返してくる

確かに喫茶店だけど、よく入ってきたな。

たいていの人はあの変な看板を見て躊躇うと思うのだが。
あの無秩序なまでの大きさは如何なものかと常々思う。

「前の看板がさ、あまりにも変だったから興味湧いちゃってさー」

なる程。玲も変な人なのか。

類は友を呼ぶってやつか？

「お姉さん、店長たちの知り合いなの？」

玲の後ろにいた柑奈が会話に入ってくる。

「……不本意ながらな」

店長こと、凌が仏頂面で答える。

「何だよ？不本意って。あたしは伊波玲よ。こいつらとはクラスメートなの」

「あ、水端柑奈です。よろしく」

玲と柑奈が互いに自己紹介する。

「お、俺！！羽次芹時です！！！」

「僕は須勝蒼佑だよ」

何故かいつの間にか直立の芹時とおっとりしたように話す蒼佑も名乗る。

「よろしくね」

芹時と蒼佑に向かって笑いながら言う玲。

「ぐはぁっ!?!」

すると、まるで吐血でもしたのではないか?と思うような声を上げる芹時。

何なんだこいつは。

「店長!?!」

勢い良く店長に近付く芹時。

さっきまでの怠け具合からは想像も出来ない速さ。

「あぁ?」

玲が来てからやけに機嫌が悪い凌。

その返事は子供はおろか、大人でも泣きそうだよ?

「店長つてあの玲さんと付き合っ……………」

「殺すぞ」

「すみませんでしたあああ！！！」

一瞬で元の場所に戻り、土下座の体勢で謝罪する芹時。
だから、何でそんなに素早いんだよ。
そんな芹時に玲が近付く。

「芹時くん。あいつは私の犬なんだよ」

「ピキッ」

玲が芹時に告げると同時に、凌の方から不気味な音がする。
あ、額に青筋浮いてる。
かなり我慢してるな。

「とある事でね、あいつは私に頭があがらんだ。だから私の犬」

「バキッ！！！」

玲が喋ると再び音がする。

今度はテーブルが。

「なる程！！玲さんかつこい……………」

「あゝあ？？」

「すみませんでしたあああ！！！」

はあ、騒がしい。

僕はため息をつくくと、玲が適当な椅子に座った。

「店長、コーヒー」

「……………」

玲が凌に向かって注文する。

それに対して思い切り無視する凌。

「あ、私淹れます」

柑奈が出るがそれを玲が止める。

「コーヒー」

「……………」

再び注文する玲。

またしても無視する凌。

「おい？」

「……………」

「実は三年前に凌が……………」

「コーヒーで良いんだなっ！……」

凌……どんな弱みを玲に握られてるんだ。
ししし、と笑う玲。

でも、何だかんだで相性が良いんだよね。

玲は凌をからかっているときが一番楽しそうだし、凌はこの時が一番自分の性格を表に出していると思う。

「何だよミリー？」

「何でもないです」

コーヒーカップをわざと大きな音を出してテーブルに置きながら聞く。

「ちよつと！？態度悪いぞ！！犬」

そんな玲の言葉を聞き流して戻る凌。

あ、握り拳作ってる。リングくらいなら簡単に潰せそうだな。

「あれ？意外とおいしい」

玲がコーヒーをブラックのまま、一口飲んで呟く。

趣味とか何とか言っているが、凌の淹れるコーヒーはとても美味しいのだ。

「店長は努力してるからね。豆の種類、産地、品質から淹れ方までこだわってるんだよ」

今まで静かにしていた蒼佑が説明し始める。

そうなんだ。知らなかった。

「蒼佑、余計な事を喋んじやねえよ」

照れ隠しか背を向けて注意する凌。

「すみません店長」

「人は見かけによらないねえ。どうせならその金髪もコーヒー色に染め直せよ」

玲がからかう口調ではなく、いつになく真面目な口調でそう呟いた。

「ただいま帰りました」

僕はマンションに戻り、いるであろう燈加さんに声をかける。

結局あの後、玲の何度かの挑発で凌がキレてみんなは逃げるように解散となった。

僕はみんなと別れて遅い昼食を取った後、その辺を何時間か散歩して、帰ってきた。

久し振りに散歩したせいで、長い時間がたっていた。
時刻は16時過ぎ。

「燈加さん？」

返事がない。出掛けているのだろうか。

僕はウィッグを外すために洗面所に向かう。

「あっ」

僕はドアを開けて、声を出す。

そこには燈加さんがいた。

手にバスタオルを持って、全裸で。

白くて綺麗な濡れた肌、上気する湯気。

それから……燈加さんがとっさに隠した両手のそれぞれの中。

一瞬の光景だった。

「すみませんっ！」

僕はすぐに洗面所から出てドアを閉める。

ため息が出た。

第12話 『店』後編（後書き）

はい、12話おしまいです。

キャラクターがブレて仕方がない作者です。

どうしようもなく性格が変わっているようで気になります。

書いている側だけでしょうか？

読む側からとっては、気にならない事を祈ります。

ところでミー君の呼称ですが、『ミー』と『ミリー』がありますね。何となく雰囲気で分けましたが、男性陣からは『ミリー』、女性陣からは『ミー』となっております。

特に分ける事に意味は無いですが、何となく気になったので、書いておきますね。

いまいち表現が拙い作者。

そのおかげで頑張ってもR15くらいの表現しか書けません（笑）

嘘です。冗談です。

書こうと思えば書けます。

表現が下手くそですが。

誰かアドバイスください。

なんかね、書いているうちに自信が無くなっていくんですよ。

いや、元から無いんですけどね。

やる気というか、最後までではしっかり書こうという気持ちだけはあります。今は。

自信が無いにも関わらず、書かなければいけない。
うまく表現出来ないプレッシャーに押しつぶされる私。
読者様からの苦情（幻聴）
追い込まれてみたいですね。
やはり私はMなんでしょうね。

後書きに書くことが無い、もしくは同じ事ばかり言っているような
気がします。
何か変わった事を書かなければ……………

思い付きませんね。

何かないかなあ。

とりあえず作者の自己紹介でもしときますか。

知人（いるか知りませんが）に特定されるのは嫌なので、限定されませんが。

ではまず資格編

・漢検 2級

・英検 準2級

・数検 2級

・???? 二段

これだけでしょうか。

????はご想像にお任せします。

では次、高校の評価（五段階）

数学	5
英語	5
理科	5
国語	5
地歴	4
公民	5
芸術	4
家庭	4
保健	5
体育	5

とまあ、こんな感じですね。

教科はまとめたりしてますが。

こんな感じの作者です。

他にも作者の事が知りたい人は質問してくださいな。
多分いないとは思いますが。
じゃあ今日もここまで。
おやすみなさい。

第13話 引っ越し

眠い。

朝、目が覚めたけど、まだ眠い。
目を閉じて再び寝る。

「ミー君」

すると燈加さんに呼ばれる。

毎朝の日課になってしまっている。
僕は目を擦って起きる。

「布団の中に入らないでください」

燈加さんは僕の布団の中に潜り込んで添い寝している。

「けち」

「けち、じゃありません」

そうして、ぶつぶつ文句を言いながら布団から出て行く。
毎朝こんな調子だ。

慣れとは恐ろしいものなんだな。
もうなんかどうでもよくなった。

洗面所での一件があつてからも燈加さんは特に変わらず、あれから
しばらく経って月曜日。

僕と燈加さんは学校の用意をして、一緒に登校する。

「おはようございます」

校門で茅依ちゃんがトコトコと近付いてくる。

「このところ良く会う。」

「今日も小動物らしくて可愛い。」

「おはようございます」

「おはよう、茅依さん」

僕と燈加さんも挨拶する。

茅依ちゃんは何か疲れた顔をしている。

「茅依ちゃん、どうかしましたか？疲れているように見えますが」

玄関で僕は茅依ちゃんに尋ねる。

すると茅依ちゃんは慌てた様子で答える。

「い、ごめんなさい。昨日までちょっとバタバタしてて……あの、引越すの」

「引つ越し？まさか転校！？」

隣から燈加さんが話に入る。

まさかいきなり転校はないだろうに。

「ち、違うの！！ただ両親が仕事で……一人暮らしするの」

転校という言葉聞いて、さらに慌てる茅依ちゃん。

やっぱりね。そんな事だろうと思った。

って、なんか聞いたような話だな。

「そうなんですか。何か手伝う事はありますか？」

「大丈夫です！！業者さんが荷物を運んでくれるそうなんで」

「でも何かあったらすぐに頼ってね。遠慮なんてする必要ないんだから。というより私たちのい……」

「急がないと遅刻しますよ！！行きましょう」

僕は燈加さんの言葉を遮る。

一緒に住んでいる事は柑奈しか知らない。

その柑奈もちよくちよく遊びに来て困っているのだが。

僕としては断りたいのだが、燈加さんに押し切られてしまう。

どうしてこんなに嫌なのだろう。

別に柑奈が嫌なわけじゃない。

誰かを家に上げるということに関して、何か心がざわつくような嫌な感じがするのだ。

自分で自分が分からない。

僕たちは教室に向かった。

「朝の続きだけど、いつ引っ越すの？」

昼、燈加さんが食事中に茅依ちゃんに聞く。

「何々！？茅依ちゃん引っ越すん？」

心が興味津々と言った様子で食いつく。
他のみんなも驚いた顔をしている。

「う、うん。朝も燈加さんとミー君に言ったんだけど、両親の仕事の都合で1人暮らしすることになったの」

「へえ。茅依に1人暮らしなんか出来んのかよ」

「あんたが言うか？ポチ」

「誰がポチだ！！」

凌と玲が騒ぎ出す。

本当に飽きないな、この2人は。

「バカ2人は放っておくとして、いつ引越すんだ？」

来人が茅依ちゃんに聞き直す。

「明日の学校が終わった後引越す予定なの。ちょっと慌ただしいけど業者さんをお願いするだけだから。荷物ももうまとめてあるし」
それでも平日の学校のある日だと大変だとおもう。

「まあ、さつきも燈加さんが言っていましたけど、何かあったらすぐに頼ってくださいね」

「俺らにも頼ってくれよー」

心も茅依ちゃんに言う。

来人は黙って頷いている。

凌と玲も気が付くと話を聞いていた。

「ありがとう」

茅依ちゃんは一言そういつて、涙ぐんでいた。これから大変だろうな。ちよくちよく気に掛けてあげよう。

昼休みが終わって僕たちは教室に向かった。凌の壊したところはずう直っていた。

そして翌日。

学校が終わって、僕はソファーに寝転がっていた。

何だか体調が悪い。

風邪でも引いただろうか。

熱は無いからただの疲労だろう。

この所落ち着いて来たけど、燈加さんが来てから大変だったからな。僕は燈加さんを見る。

部屋の埃を拭いて掃除している。

「なーに？」

「いや、何でもないです」

僕の視線に気付いて聞く。

僕が答えた後にインターホンの音が鳴った。

僕が玄関に向かう。

ドア越しに声が聞こえる。

「今日上の階に引越して来たものですけど」

挨拶ですか。ご苦労様なことですね。

僕は玄関の扉を開ける。

「え？」

そこには茅依ちゃんがいた。

第13話 引っ越し（後書き）

今書き終わったため、後書きの時間がありませんでした。

第14話 同居

「ミー君!？」

「茅依ちゃん!？」

僕と茅依ちゃんの声が重なる。

引っ越してこのマンションに!？
まずい。色んな意味で。

「ミー君ここに住んでたの?奇遇だねっ。私この上に引っ越したの。
あー驚いちゃった。」

茅依ちゃんが無邪気に笑顔をこぼして、僕に粗品を渡す。律儀な子
だ。

よし、燈加さんの事はバレないようにして、何とかやり過す……

「あれ?茅依さん?」

せなかつた。

後ろから声がする。

「燈加さん!？えと、どうして?」

茅依ちゃんが僕見る。

そんな目で見ないで欲しい。

まるで僕が悪いことをしているみたいじゃないか。

……良いことをしているわけでもないけど。
とりあえず

「えっと、両親の仕事の都合で一緒に暮らすことになったんですねよ」
柑奈と同じように説明する。

「事情は分かりました」

中に入って詳しく説明すると茅依ちゃんが不機嫌そうな声で言う。
もちろん燈加さんとはいとこではない、という事だけは言っていない。
最近あんまり気にならなくなってきたけど、赤の他人と同棲って世間的にアウトだと思う。

「だからいつも一緒に登校してたんですね……」（燈加さんずるいです）

「まあ、そうなんです」

小さな声で茅依ちゃんが喋るので、最初のほうしか聞こえない。

「別に隠すことでもないんだけどね」

「わざわざ公表する事でもないです」

来人あたりに知られたら、それをネタに何を脅されるか分かったもんじゃない。

それから、心に知られたら多分次の日には学校中に知れ渡って呼び出しを食らうのではないだろうか。
口が軽いからなあ。

「あの、ミー君？」

「何ですか？」

遠慮がちな声で話しかけられる。

「昼に言ってくれた事、覚えてる？」

昼？あー、何かあったら言ってるね、みたいなやつかな。
何か手伝って欲しい事でもってあるのだろうか。

「はい。何かあるんですか？何でも遠慮せずに言ってください」

「あの、……に……でも……いですか？」

「はい？すみません。聞こえませんでした」

茅依ちゃんは若干俯きながら僕を見て言ったのだが、断片的にしか聞き取れなかった。

茅依ちゃんは更に俯いて、もじもじしている。
と思ったら顔を上げて、大きな声で言った。

「私もここに住んでも良いですかっ？」

「…………えっ？」

つい間の抜けた声が出た。

ここに住む！？茅依ちゃんも！？

「そんなの駄……………」

「良いわよ！！これから賑やかになるわねっ」

「ほんとに！？ありがとっっ」

再び僕の考えをぶち壊す燈加さん。

その返事で顔をパーッと輝かせる茅依ちゃん。

…………僕の意志と世間体は無視ですか？

「ちょっと待つてください！！そんな安請け合いしないでください」

「何で？駄目なの？」

何が駄目なの？という顔をして聞き返す。

「何でって……………」

「やっぱり迷惑だよね…………ごめんねミー君……………」

僕が言葉に詰まっていると、茅依ちゃんが明らかに落ち込んで呟く。
燈加さんに白い眼で見られる。

「ミー君っ！！茅依さんが1人暮らしすることに心細いとは思わないの！？せっかく私たちがいるんだから、一緒に暮らした方が茅依

さんの為になるでしょっ?」

怒られた。

それくらい分かってるけど。

ああ、もういいや。

何とでもしてくれ。

僕は投げやりになる。

というより、なんだかんだでまた押し切られた形に。

「分かりました。好きにしてください」

「あの、我が儘言っでごめんね」

僕が投げやりにそう言つと、茅依ちゃんが申し訳無さそうに謝ってくる。

「良いんですよ、気にしないで。別に嫌な訳じゃ無いですから。茅依ちゃんこそ嫌じゃないんですか?」

「ううん。むしろ嬉し……何でもないっ!」

顔を赤らめて首を激しく振る。

相変わらずの小動物っぷり。

「じゃあ茅依さんの荷物を運ぶわよ!」

燈加さんの指揮で事が進められる。

こうして同居人が一人増えた。

第14話 同居（後書き）

体調悪いです。

あまりに体調悪すぎて昨日寝てて、起きたら23時回ってましたよ。

13話も全く書かずに。

焦りましたね。

毎日0時に投稿しようと思ったのですが…

ギリギリ間に合いました。

ガチな話一分前に予約投稿しました。

そのおかげでっ！！

くっ、後書きが書けなかったじゃないですか！！

まさかの一言で終わらせるとは。

なんて屈辱。

楽しみにしてた方（万が一いらっしやれば）、本当に申し訳ありません。

次からは気を付けます。

後悔と反省が尽きません。

むしろスッキリして良かったと思う、などのご意見は受け付けておりません。あしからず。

おまけに本文も3、40分で書いたので、いつも以上に中身が無いですね。

後悔はしてるけど反省はしてません。

本文に関しては。

今日も頭が痛かったんですけどね、頑張りましたよ。
途中で諦めたら負けかな、と思います。
クオリティーは置いといて。

だんだんとモチベーションが下がってきてますね。
全体的な話としては、起承転結の起の更に序盤くらいかな、と思
います。

早く先の話が書きたい……
それでもしつかりと1話1話書きたい……
そんな葛藤があります。
まあ焦らずマイペースで書いていきます。

私が諦めるのが先か、読者様に見放されるのが先か。
はたまた、最後まで書ききって読者様にも全て読んでいただけるか。
どうなりますでしょうか。

私の予想では、『見放される』ですね。
こんな作者ですから。
大穴は『完結・完読』ですね。

あー、喉が痛い。
せき込んだら痰に混じって血が出ましたよ。
頭も痛いですし、寒いですし……
寒いのは苦手ですね。
暑いのも苦手ですが。
作者はおっとりした人なので暖かい春が一番好きですね。
誕生日も一応春ですし。一応。ギリギリ。かろうじて。

まだ字数に余裕（少し）があるので、私の自己紹介をしましょう。

- ・好きな食べ物　　果物、野菜
- ・嫌いな食べ物　　見た目の悪い初めて見るもの（食わず嫌い）
- ・兄弟姉妹　　兄1人だけ
- ・好きな色　　無彩色系

いつも思ってますけど、自己紹介って難しいですね。

何を言えばいいかさっぱりですよ。

ほんとに。

自分からやり始めたんですが、苦手ですね。

ちなみに、作者の顔はエヴァンゲリ　ンの渚カ　ルに似ています。

……某SNSサイトの顔　えき！で出たんですよ！！
自称じゃないです！！

ああ、もう字数制限が！！とにかく作者は

第15話 プレゼント

「ミー君！！起きなさい！！」

朝、燈加さんの声で目が覚める。

目を開けるとベッドの横に燈加さんが立っていて、僕を見下ろしている。

あれ？珍しい光景だ。

「今日は布団の中に入って来なかったんですね。これをきりに止めて下さい」

どうも寝ぼけた声ができる。

油断したら意識が飛びそうではあるが。

「だって先客がいたんだもん」

「そうですか。それは残ね……先客？」

やっと完全に起きる。

僕が布団をめくると……茅依ちゃんが丸まって僕の腰のあたりに抱きついていてた。

小動物が縮こまるように手と足が顔の前にある状態でそれは微睡んでいた。

「茅依ちゃん！！」

ああ、そうだった。

昨日から居候されるんだった。

ていつか自分の部屋使つてよー！
何でここに入ってくるんだよ。
燈加さんといい、柑奈といい、茅依ちゃんといい。

「……んー？」

茅依ちゃんが目をこすりながら、手をついて体を起こす。
柑奈と違ってパジャマをちゃんと着ているのがせめてもの救い。

「むー」

正座から両足を左右に崩した形で座り、何やら動物の鳴き声のような可愛らしい声をあげている。

目がしつかりと開いてないからまだ寝ぼけているに違いな……

「ちよっ！？茅依ちゃん！？」

突然抱きつかれてその勢いで後ろに倒れる。

「にゃーにゃー」

猫！？

まるで猫のように声をあげ、僕のお腹に顔をうずめる。

「あらあら朝から過激ね」

「見てないで止めてくださいっ！！」

僕は一人で穏やかな朝を迎える事が出来ないのだろうか。

「ほんとにごめんなさいっ!」

「もういいですよ。気にしてませんから」

「ミー君もまんざら嫌でもなさそうだったしね」

「うるさいですよ」

僕の右隣に茅依ちゃん。左隣に燈加さん。

3人で学校に向かう。

と言っても5分程で着くけど。

朝の寝ぼけ騒動の事で茅依ちゃんから何度も謝られている。

結局、あの後しばらくあの状態が続いたのだが、茅依ちゃん……寝ぼけ過ぎ。

見た目と普段の言動から考えている以上に子供だったとは。

先が思いやられる。ついため息がでる。

ちなみに髪の毛の事を茅依ちゃんはもう知っている。

これから一緒に暮らす上で、隠しきれものじゃないし、隠すほどでもない……という燈加さんの考えで、無理やりカミングアウト。

僕としては隠しておきたかったのだが。

理由は……特にないけど。

でも何故か隠しておきたかったんだ。

茅依ちゃんには僕の髪の毛を見ても、「綺麗」の一言であとは何も変わらなかった。

他のやつにはもちろん秘密だ。

僕たちは学校への道のりを喋りながら歩いていく。

茅依ちゃんはまだ謝っていた。

「さあて帰りますか」

放課後、僕は特に用事が無いので帰り支度をする。

「ミリーも何か部活すればいいのに」

「なんなら生徒会に連れて行っても構わないぞ」

テニス部と生徒会、それぞれの活動場所に向かおうとする心と来人が声をかけてくる。

「考えておきます」

「その返事は断りと解釈と出来るんだけどな」

その通りです。

来人の言うとおりする気はないから。

来人はそう言うと教室を出る。
心もテニスへと向かって行った。

もう教室に残っている生徒は少ない。

玲は放課後と同時にソフトボールの練習にダッシュで向かうし、燈加さんは「掃除とか料理とかしなくちゃ」といつもすぐに帰宅する。

たまに荷物持ちとして僕が使われない時以外はすぐに帰って行く。

そして残っているのは、机に突っ伏して寝ている凌。玲が悪戯して貼った『駄犬』と書いてある紙に気付く様子も全くない。

それから手芸部の茅依ちゃん……と鈴木（仮）他3名。

「茅依ちゃんは今日も部活？」

「はい。今作ってるの今月まで仕上げないといけないから」

「へー、何作ってるの？」

「えと、燈加さんの、誕生日プレゼントなの」

ちよっと気恥ずかしそうに答える茅依ちゃん。

「燈加さんの？」

「うん。4月30日なんだよ。知らなかった？」

首を傾げながら聞かれる。

全く知らなかった。

というより燈加さんのこと自体良く知らない。

一緒に生活して分かることもあるけど、根本的な燈加さんが何者な

のか知らない。

あまり気にならない、気に掛けないようにしていた節もあった。

「知りませんでしたね。僕も何かしたほうが良いですかね」

「うん！ーじゃあ何か作ってあげたら？ミー君の手作りだったら燈加さんきつと喜ぶよ！ー」

自信満々といった感じで茅依ちゃんが提案する。

やけに力が入っているような。

まあどうせプレゼントするなら自分で作った方が良くもしれない。

「でも何を作れば良いか分かりませんし」

「この本を参考にしたらいいよ。作り方もあるし、デザインを工夫したらもっと良くなるよっ」

「じゃあそうします」

「うんっ」

こうして僕は茅依ちゃんと、燈加さんへのプレゼントを作り始めた。

第15話 プレゼント（後書き）

はい、15話終了です。

毎日女の子と一緒に寝るミー君。

それにしても、柑奈といい、茅依ちゃんといい何故部屋を間違え、かつ布団に潜り込むのでしょうか。

答えは簡単。

作者のつご……ゲフンゲフン。

前の後書きで起承転結の起の序盤くらいと言いましたが、あと何話かくらいで区切りがつきそうです。

むしろ今まではエピソード……プロローグ？どっちでしたか思い出せませんが。

そんな感じです。

これ以上書くとネタバレなので止めます。

あまりにも内容が薄い上にネタバレなんかしたら、読む時間が勿体ないですよ。

只でさえこんな作者ですから。

あー喉が痛いよう。

昨日はあまりの頭痛に寝れませんでした。

薬を飲んだら多少楽になったんですけど。

眠れなくなるくらいの頭痛は初めてだったんで……。

はっ！？初めてを奪われたっ！？

とまあ冗談をさておき、実際体調よろしくないあるヨ。熱があるとテンションがなぜか急上昇する作者です。

平熱（35.4）よりも熱（39.0）がある方が元気な私。平熱だと布団に引きこもっていたい私。

熱があると外を出歩きたい私。

矛盾してます。

まあ、人生矛盾だらけなので特に気にしませんけどね。

人生楽ありゃ、食うもんあるさ。

あーお腹すいた。

今日もバイトでしたね。

いやー今日はさすがにイラッ ってきましたね。

温厚な私でも客にキレるところでしたよ。

「私のうち……話を聞けええっ!!」

ってね。

我慢しましたけど。

私普段は怒らないんですけどね。

喜怒哀楽のうち怒の感情を出さないんですよ。

だからって殺気とか闘気とか（だったかな？）が無いって訳じゃないですが。

まあ温和しいんですよ。私は。

そんな私、悩みますね。

生まれていちどもマジ切れしたこと無いですよ。

なんかそこまでいかないんですよ。

まあ良いことかもしれませんが。

それだけでは・・・（ノシ）
それだけでは・・・（ノシ）

第16話 敬語の訳

「わざわざ付き合ってくれてありがとうございます」

「気にしないで。私も必要なのあったの」

今僕は茅依ちゃんの家内で隣駅までプレゼントの材料を買いに来ている。

ちなみに凌をちゃんと起こしてからきている。

隣駅の近くにはこういうのを探すのにはうってつけの店もあれば、他に欲しいものがある時もないここに来ればある。

結局、僕はオルゴールを作ることにした。

中の音源の機械はカタログで2、3日あれば届くから、箱を作って取り付けるだけだ。

と言っても箱を選んで飾り付けをして、中に音源も取り付けたり、調整したりしないといけないから大変そうだな。

なんとか間に合いはしそうだけど。茅依ちゃんはぬいぐるみを作るらしい。

何件か回って手頃な箱と必要な物を買って集めて、僕たちは遅くならないうちに帰宅した。

燈加さんに感づかれてはいけない。

「では作業を開始しよう」

「うんっ」

翌日の放課後、僕たちはそれぞれのプレゼントを作る。

例によって他のメンバーはいない。

凌を除いて。

僕は箱に穴を開ける。オルゴールのゼンマイが出る部分だ。

他にも何ヶ所か小さな穴を開ける。

ちよっとした仕掛けに使うためだ。

それが終わると箱と材料に色を塗る。

乾くまでが時間がかかる。

僕は茅依ちゃんの作業を眺める事にした。僕より早く始めていた茅依ちゃんは、ぬいぐるみの体の部分と思われる形を作り上げていた。色からして熊か狸か。もしかして犬かもしれない。茶色の動物は多いからな。

結構なサイズだ。

体の部分だけで40cm以上ある。

完成したらこの倍は軽くあるんじゃないか。

ぬいぐるみって基本二頭身くらいだし。

茅依ちゃんは針と糸を使って頑張っている。

どうやら縫った部分が見えないようにしているみたいだ。

「ミー君……あんまり見ないでください」

「あ、すみません」

茅依ちゃんが僕の視線に気付いて、恥ずかしそうにぬいぐるみで顔を半分隠す。

僕は乾き具合を見る。

まだまだ渴きそうにない。

今日はこれで終わりそうだな。

僕は凌を起こしに行く。

次の日はニスで艶をだして乾くのを待って終わった。

燈加さんの誕生日まで後5日間。

明日は土曜日。

朝。目が覚める。

今日は土曜日だけど燈加さんのプレゼントを作るために茅依ちゃんと学校に行く予定だ。

まだ眠いけど早めに起きよう。

僕は布団から出ようとす。

「にゃーあっ」

僕が動くと布団から不機嫌そうな鳴き声がある。

布団をめくると、寝ぼけてまるまった小動物。

「いい加減自分の部屋で寝てください」

ため息まじりに言う。
もういつその事、鍵でも付けようか。
あれからずつとこの調子だ。

「にゃー」

「起きてください」

僕は茅依ちゃんを引き剥がして起こす。
なんだか妹ができたようだ。
同学年だけだ。

「今日も頑張って作ろうねっ」

「はい」

茅依ちゃんひ手芸部の活動、僕は来人の手伝いと言って学校に来た。
燈加さんに怪しまれないためにだ。
逆に怪しまれたらどうか。
ともかく僕たちは黙々と作業を始める。

「あのね、ミー君」

作業していると、ふと茅依ちゃんに声をかけられる。
僕は顔を上げて尋ねる。

「何ですか？」

「あの、ちょっと気になったんだけどね、聞いてもいいかな？」

「はい、どうぞ。」

「何で……何でミー君は普通に話してくれないのかな？って」
聞きづらそうに茅依ちゃんが目をそらす。

「それは……」

敬語の訳……か。

正直僕自身かららない。

気づけば自然と使っていた。

一度試しに普通に話してみた時は、ひどく心がざわついた気がした。
頭が警報をあげているような激しい頭痛、胃が全てを拒絶するよう
な吐き気、臓器が捻れるような腹痛、体中の汗腺という汗腺から冷
や汗が流れ、体の中で地震が起きてるように震えた。
それ以来、敬語以外の事を余計に考えなくなつた。
考えたくなくなつた。

僕が僕自身を守るために必要な事だった。

「ミー君？顔色悪いよ？」

気が付くと茅依ちゃんが心配そうに顔を覗き込んでいた。どうやら考え込んでいたみたいだ。

「大丈夫です。気が付いたら敬語を使ってたんですよ」

「そうなんだ」

僕は心配させないように努めて笑顔をつくる。茅依ちゃんは聞かない方が良いと考えながら、そう言ったきり黙って手を動かした。

最近僕自身の事が本当に分からない。

敬語の訳、知人を家に入れたくない訳、自分の髪を隠す訳。

こんな事を考えたのも燈加さんが来てからだ。

彼女は僕の事を知っているのだろうか。

僕は一体何なんだろうか。

第16話 敬語の訳（後書き）

はい16話終わりですよ。

ちょっとだけシリアスな感じになりそうですね。

それはさておき、新しい話を書いたんで、ぜひ見てくださいね。タイトルは『代わればチート、代われば幼女』です。

どんな話かと言うと、まあ書くのが面倒なんで読んでください。と言っても1話じゃちょっと分からないんですが。

ここで言ってもネタバレなんでね。

止めときますね。

来週を楽しみに。

あつ、週1更新予定なんですネ。

こっちに支障が無いように。

これ以上薄味になると困りますから。

えー1つ感想を。

アーチャーカッコいい。

もちろん赤いほうですよ。

金の方も良かったんですけどね。

Zeroを見てからちよつと………（笑）

むしろバーサーカーカッコいい。

私の個人的なランク付け（Zero）

あくまで個人の感想です

サーヴァント編

- 1位 バーサーカー
- 2位 ランサー
- 3位 セイバー
- 4位 ライダー
- 5位 ギル メッシュ
- 6位 キャスター

圏外 アサシン

マスター編

- 1位 雨 龍之介
- 2位 ウエイバー・ベル ット
- 3位 ケイネス・エ メロイ・アーチボルト
- 4位 間 雁夜
- 5位 衛宮 嗣
- 6位 峰綺礼
- 7位 遠坂時

つてとこですかね。

ちなみに戦闘シーンを見るまではギルガメ シュさんはダントツ1位、バーサーカーさんはキャスターさんより上ってくらいでしたね。龍 介さんはね「クウール!! あんた超クールだよ!!」のセリフで惚れましたね。

若干セリフが間違ってるかもしれませんが。

一番まともな理由で好きなのは雁 さんですかね。
闘う理由がカッコいいです。

普通にカッコいいです。

ただ虫はちよつと……

クオリティーが高いのも考え物ですね。

ケイ スさんの水銀のあれ良いですね。

一家に一塊ぜひと欲しいですね。

あと最初のアサシン（笑）さん。

笑うしか無いですよ。

悲しいとか通り越しての可笑しさですよ。

鈴木（仮）並の扱いじゃないですか（笑）
すみませんアサシンさん（笑）

なんて一言とか言いながらももう字数制限。

まあこんな日もありますよね。

最後に、あくまで私の個人的な感想ですので。あしからず。

あと、一応申し訳程度に名前を隠してますが、必要ありますかね？

そんなわけでまた明日（・・・）ノシ

あ、風邪はすっかり治りました。

どうも御心配おかけしました。

第17話 悪夢

僕の頬に伝う血

僕に痛みは無い

僕のそれではないから

僕は茫然と立っていた

僕は動けなかった

僕の目の前に倒れる人

僕の視界に広がる赤黒い血

僕の周囲のざわつき

僕にとって遠くから聞こえる救急車の音

僕は

僕は………

「…君！…ミー君っ！！」

「はっ！？」

僕は飛び起きる。

燈加さんと茅依ちゃんが僕を心配そうに見ている。

「はあっ、はあっ」

夢……か？

呼吸が乱れている。シャツも汗でぐっしょりと濡れて張り付いている。

あれは……あの光景は……

「ミー君……大丈夫？」

「ミー君うなされていたわよ」

「だ……い丈夫です」

呼吸が次第に落ち着いてくる。

何か思い出しそうだったんだけど、思い出せなかった。

僕はベッドから降りる。

とりあえず着替えたい。

汗が気持ち悪い。

「今日は休んだ方がいいんじゃないかな」

茅依ちゃんに心配そうに言われる。

休む気などさらさらない。

「大丈夫ですよ。ただ悪い夢見ただけですから」

「何が大丈夫なのよ。ヒドい顔してるわよ」

今度は燈加さんに少し強めに言われる。

「悪い夢見ただけですから。汗拭いて、着替えて顔洗えばすぐに治りますよ」

僕は努めて明るく言った。

「今日で仕上がりそうですね」

「うんっ」

燈加さんの誕生日の前日。

僕と茅依ちゃんはようやくプレゼントの仕上げに入る。

「間に合って良かったね」

茅依ちゃんは笑顔で言う。

手には猫のぬいぐるみ。

どうやら熊でも狸でも犬でもなくて猫だったらしい。

茅依ちゃんはほつれが無いか確かめている。

一方、僕は部品を組み立てる。

この作業と動作のチェック、細かい調整が終えればようやく完成だ。細部をしっかりと作りたかったので今日までにずいぶん時間がかかってしまった。

30分後、僕のオルゴールが完成する。

少し横広の箱の上に、ブランコに乗った男の子と女の子がいる。

ゼンマイを巻くと懐かしいような音が流れて、2人はブランコを漕ぐ。

全体的に夕焼けを思わせるようなオレンジ色を帯びた感じに仕上げた。

「何だか微笑ましい光景なのに、物悲しいような気持ちで自然に涙が出ちゃいそう。ミー君の気持ちがこもった良いプレゼントだねっ」

茅依ちゃんが微笑む。

そして不思議そうに尋ねる。

「でも、どうしてこういうのにしたの？」

「理由は特に無いですね。何となく頭に浮かんだ光景をそのまま作っただけ」

僕は答える。

その言葉に嘘は無い。

でも、何故か完成したプレゼントを見ると悲しくなる。

僕は茅依ちゃんのプレゼントに話を逸らす。

「茅依ちゃんも完成したみたいですね。とても上手に出来ていると思いますよ」

「ありがとう」

茅依ちゃんは照れくさそうにはにかむ。

「じゃあ明日これを渡し……あっ!？」

茅依ちゃんがいきなり大きな声を上げる。

「どうかしましたか？」

「包装用の箱とか用意してなかった」

「あ、そうでしたね」

茅依ちゃんが舌をちよっぴり出して笑う。

確かにこのまま渡すのもあれかな？

「じゃあ明日にでも買ってそのまま包装してもらいましょう」

今日これから行くにはちよっと時間がかかるからな。

最近何かと帰宅が遅くなり気味だし。

「うーん、そだね。じゃあ明日ねっ」

僕たちは片付けを始める。

「ミー君」

「はい」

校門を出たところで茅依ちゃんに声をかけられる。

「あのね、ちょっと聞いて良いかな？」

茅依ちゃんが遠慮がちに聞く。

「今日の朝の事ですか？」

「えっ！？うん。よく分かったね」

茅依ちゃんがばつが悪そうに言う。

「茅依ちゃんは分かりやすいですからね」

朝のあれから、茅依ちゃんと燈加さんは僕に気を遣ってか、何も言
つてこなかった。

正直僕自身も、しばらく落ち着かなかつたから助かった。

「茅依ちゃんが気にする事はありませんよ。ただの悪い夢です」

「そっか。何かあったらすぐに相談してねっ。私に出来ることなら
何でもするから」

茅依ちゃんが僕を真剣な目で見て言う。

「ありがとうございます。頼りにしてますね」

僕は笑って答えた。

心の中で一抹の不安と疑問を抱えながら。

その日の夜。私はまた電話を掛けた。

「もしもし。燈加です。……………ええ、ちょっと最近は良くなってきていると思います。柑奈さんや茅依さんのおかげですね。……………」

……………ふふ、そうかもしれないですね。それはそうと、今日ミー君が夢にうなされたんです。……………はい。もしかしたらあの時の事じゃないかと思ってます。……………分かってます。悪い方に行かないと良いんですけど。……………はい。……………また連絡します。それじゃあ」

電話を切った。

しばらく私はその場で考え込む。

私は急ぎ過ぎただろうか。

ゆっくり時間をかけるべきだっただろうか。

でも、早くなんとかしたかった。

いや、しなければならなかった。

そんな思いが私を突き動かした。

ガラス越しに部屋を見る。

薄暗い部屋。

いつもにまして暗く見える。

私は空を見上げる。

星も月も見えなかった。

第17話 悪夢（後書き）

はい、これで17話！！

前話よりもシリアスな感じになりましたね。

悪夢が意味するものとは！？

燈加がしようとしていることとは！？

燈加の言うあの時の事とは！？

まあそのうち分かります。

期待しないで待っててください。

それはそうと、書き始めから言ってきた事なのですが、キャラクター
ーがブレてます。

私の過剰な意識でしょうか。

読者様からはいかがでしょうか。

どうにも心配です。

そもそも、心と来人の出番の少なさっ！！

ちゃんと個別ルートを発生すべきだったでしょうか。

私は急ぎ過ぎただろうか。

ゆっくり時間をかけるべきだっただろうか。

とか言ってみます。

まあ、そんな心配もある企みによって私は一気に解決してみます。

それが何かは言えませんが、そのうち後書きで公開すると思います。

どのように出会ったかとかは本編にあまり影響が無いと思うので、番外編としてそのうち書くと思いますよ。
どのキャラから書くのがしら。
要望があればどうぞっ!!

寒いです。

凄く寒いです。

とてつもなく寒いです。

想像を超えて寒いです。

とにかく寒いです。

比較的暖かい土日を過ごした私。

そんな温室育ちな私は何も疑う事なく、昨日までの調子と服装で外に出ます。

カチャ（扉を開ける音）

ブルツ（体が震える音）

バタンツ（扉を閉める音）

その間わずか二秒フラット。

私は引きこもりになるのです。

私が悪いんじゃない、外気が悪いんだ!!

これは逃げじゃない、戦略的撤退だ!!

そんなわけでヌクヌクと過ごした私。

明日は厚着する。

同じ過ちを繰り返さないのが人間です。

なんとか〜会わざれば刮目して見よ。

とかいうあれですよ。

明日は負けない。

今日の私とは一味違う。

明日にきらめけ！！夢にときめけ！！by川t……ゲフゲフ。

何だかんだで駄目な私。

と見せかけて、やるときはやる私です。

与えられた仕事はやりきります。

自分から率先して動く行動力もあります。

とっさの判断力も、運動能力もあります。

ただ、やる気になればの話です。

最低限の事、興味のある事、気が向いた事においては完璧です。

その他は結構手を抜きます。

人間そんなもんですよ？

全球全力投球なんて無理ですよ。

時にはだらけるのも必要ですよ。

やるべき事を出れば、なんとか生きられますよ。

そんな作者です。

今日はちょいシリアスなお話だったので、だらだらと)・・・(ノシ

第18話 悪夢の意味

視界に広がる赤、赤、赤。

悲痛な叫び声が聞こえる。

叫んでいたのは他でもない僕だった。

僕は地面に手と膝をついてうなだれていた。

救急車の音が遠ざかって行く。

僕は誰かに支えられて連れて行かれる。

僕はされるがままに動く。

心が壊れていた。

ただ1つ。

僕の意識が残っていた

僕のせいだ……

「はあっ、はあっ」

僕は起きた。またあの夢だ。体を起こす。

昨日と同じく汗をかいている。

動悸がなかなか収まらない。

外はまだ暗かった。

携帯電話の時間を見る。

4月30日4時12分。

「ミー君？」

下を見ると茅依ちゃんが布団から頭だけを出している。
こんな時間からいるのか。

「また夢？」

心配そうに僕を見上げる。

「大丈夫です。茅依ちゃんは寝ててください」

僕は笑顔を作ってそう言っつて布団から出る。
茅依ちゃんは何か言っつてきたが相手にしない。
僕は部屋を後にする。

早く1人になりたかった。
心がひどくざわついていた。
茅依ちゃんを見ると一際激しくなった。
嫌悪感に似た感情。

茅依ちゃんに対してではない。
自分に対してだ。

僕は顔を洗いに洗面所に向かった。

「はは、はははっ」

僕は鏡を見て自嘲的に笑う。
なんて顔をしてるんだ僕は。
蒼白な顔、ヒステリックに笑う口、それに対して眼は死んでいる。

「ははは……うっ!？」

僕は嘔吐した。

胃液が出る。胃がねじ切れるように痛む。頭痛がする。咳き込む。
目眩がする。

僕はしばらくそこに突っ伏した。

一人でいたかった。

誰ともいたくなかった。

誰にも優しくされなくなかった。

そんな気持ちだけが心を占めていた。

昨日今日と夢を見て分かった事が1つだけあった。

僕は誰からも大切にされてはいけない。

朝。僕は一人で登校した。

第18話 悪夢の意味（後書き）

はい18話です。

短いです。すみません。

心配しないでください。

次話も短いですから（笑）

はいシリアス感が続きます。

いったいどうなるのか!?

それは作者のみぞ知る。

今日は話が良く文字になったので、21話まで書き終えましたよ。と言っても細かい調整や、なんやかんやで時間がかかりそうです。

今までで一番盛り上がりそうなシーンなので。

上手く纏められなかったらごめんなさい。

今のうちに謝っておきますね。

どうもシリアスな感じは苦手なので。

こうしたら良いってアドバイスなんかがあると助かりますが。

私はボキヤブラリーも感情も貧困です。

ああ、基本骨子を読み取る力が欲しい。

魔術回路が欲しい。

水銀の丸い塊が欲しい。

とまあ最近またはまってきてます。

あれですよ。

クオリティーが高すぎるのが悪いんですよ。

赤い薔薇の槍とか黄色い薔薇の槍とか落ちてないでしょうか。（ゲ

イ・ジャルグとゲイ・ボーでしたっけ？)

ゲイ・ボルグなんてあったら良いですよね。

それに黄金の鞘なんか重宝するのではないのでしょうか。

まあ私が持っていてもなんの効果も発揮することもないでしょう。

私が触れる物は全て宝g……

まあ私は幸いに14歳あたり特有の精神疾患は抱えてないので大丈夫です。

心体ともに健康健全ですよ。

まあでも技名を叫ぶと厨二と言うのも安直な考えのような気がします。

掛け声って大事ですよ？

綱引きだって無言で綱の引き合いしてたらシユールな光景じゃないですか。

御神輿みたいな祭事だって、ワッショイって言わなきゃ危ない宗教にしか見えませんよ？

とある武道なんて技名を言わなきゃルール上絶対に勝てないんですよ？

まあそんなわけで掛け声は大事。OK？

そんな事を書いてたら、本文より長くなりましたね。

どうでしょうか。

まあシリアスな内容だったので、ふざけた後書きでちょうど良いのでは。

足して2で割ったら0みたいなの。

まあ確実に後書きがマイナス数値ですね。

不本意ですが。

……あれ？いくつで割っても0？（笑）

まあ正直な話、前話くらいから結構、真面目とというか何というか、

まあとにかく頑張ってるつもりです。

後3話くらいで一区切りでしょうか。

なるべく濃いお話になるように努力します。

今までが薄い分余計に。

あ、最後に次話は茅依ちゃん視点になりますので。

お気をつけください。

ではまた明日（・・・）ノシ

第19話 ミー君の異変（前書き）

予告通り茅依視点です。

第19話 ミー君の異変

ミー君がおかしい。

私は昼を屋上でみんなと食べながら思う。

でも、この中にミー君はいない。

朝も1人で先に登校していた。

やっぱり朝の夢のせいなのかな。

朝。私は目を覚ました。

珍しく意識はしっかりしていた。

布団から顔を出す。

外はまだ暗かった。

ミー君？起きてるの？

携帯電話の光でミー君の顔がはつきりしていた。

蒼白な顔でミー君とは思えない形相に見えた。

ミー君が携帯電話をしまう。

今度は暗いせいでか普通に見える。

私の気のせいなのかな？

「ミー君？」

私は声を掛けてみる。

ミー君は私に気付いて見る。
やっぱり様子がおかしいかも。

「また夢？」

あるとしたらこれが原因だと思った。

「大丈夫です。茅依ちゃんは寝ててください」

そう言って布団から出て行く。

やっぱりおかしいっ。

ミー君は笑顔なつもりだろうけど、顔がひきつっていた。

「ミー君待って！！」

私はミー君を追って布団を出る。

「バタンッ」

扉が閉まる音が、静かなはずなのに私には大きく聞こえた。
まるで、ミー君が私を拒絶しているみたいに。
私はその場にしゃがみ込んで泣いてしまった。

「ミリーのやつどっつしたんだ？」

私は来人君の声ではっとした。
来人君はなんだかイライラしているみたい。

「話しかけてもいつも以上に愛想ないし、今だってどこにいるかね〜」

心君がパンを食べながら言う。
食べ損なったジャムが横から落ちてるよ。

「ミリーのやつおかしいぜ」

「あんたはいつもおかしいけどな」

「うるせーよ」

「……ごめん」

凌君と玲ちゃん……いつもなら言い争いになるのに……みんなも三
一君の事が心配なんだね。

「燈加さん……」

私は燈加さんを見る。

朝の事はもう言っている。

燈加さんは何も言わずに何か考えているように見えた。

その後もミー君は1人だった。

誰かが話しかけても必要最低限の事しか返さないし、自分から輪に入る事もなかった。

それに、一度も笑わなかった。

まるで心を閉ざしているみたいに。私は何だかそれが怖くて声が掛けられなかった。

放課後私は今日学校に来て初めてミー君に声を掛けた。

第19話 ミー君の異変（後書き）

19話でした。

短くてすみません。

もう一つ謝らなければいけないことが。

月曜日に投稿した『代わればチート、代われば幼女』という作品ですが、

削除しました。ごめんなさい。

『僕は』に集中したかったのと、上手く纏められなかったからという理由からです。

やっぱり私には早かったですね。

反省です。ごめんなさい。

読んでくださっていた方、続きが気になっていた方、本当にごめんなさいです。

今日の後書きはこのくらいにしておきます。

それでは、失礼します。

すみませんでした。

第20話 2度目の過ち

7時前。僕は学校に着いた。
まだ誰もいなかった。

僕は校内に入る。

中はひっそりと静まり返っている。
僕の微かな足音だけが小さく響く。

燈加さんと茅依ちゃんには何も言わずに黙って家を出た。
顔を会わせたくなかった。

僕は校内を意味もなく歩き回る。

昨日今日と見た夢。

見たこともないはずの光景。

それなのになぜか頭から離れない。

そして……誰からも大切に思われてはいけない。
なぜか僕はそう思った。

そういえば燈加さんを始め、柑奈、茅依ちゃんと本当は家に入れた
りしたくなかったはずなのに迎え入れるようになった。

髪の毛も燈加さんと茅依ちゃんに知られている。

それも気にしなくなっていた。

いつの間にか僕は変わってきていた。

それじゃ駄目なんだ。

でも何が駄目なんだろう。

分からない。

分からない事ばかりだ。

気が付くと8時30分を回っていた。

随分と長い時間考え事をしながら歩いていたみたいだ。

僕は教室へ向かう。

教室へ戻ると声を掛けられる。

僕は返す。呼吸をするようにただ自然に何も考えず、必要最低限に。

昼。僕は屋上に行かなかった。

適当にパンを買い、中庭で1人で食べる。

それだけ。

午後からは話しかけられる事も少なくなった。

そして放課後。

茅依ちゃんに声を掛けられた。

「ミー君……燈加さんのプレゼントの包装なんだけど……」

茅依ちゃんは最後まで言わずに下を向く。

「覚えていますよ」

僕は答える。

昨日の約束を反故にするわけにはいかない。

茅依ちゃんは顔をあげて嬉しそうにしていた。

「じゃあっ行こっ」

「はい」

僕は茅依ちゃんの後をついていく。

「綺麗な包装になったねっ」

「はい」

包装を終え、僕と茅依ちゃんは駅に向かっていく。

プレゼントは僕の鞆の中だ。

茅依ちゃんはやたらと話しかけてくるが、僕はこんな返事しかして
いない。

電車に乗り、家からの最寄り駅に着く。
ここから歩いて10分程。

「燈加さんに渡すの楽しみだねっ」

そう言っただけで楽しそうに笑う。

無理している笑顔だ。

少し心が痛む。

僕は何も言わなかった。

大きな道路に出る。

これを渡ってすぐのところの家がある。

信号が青に変わって、僕が先に渡る。

後ろから茅依ちゃんが付いてくる。

僕は前を向いたまま茅依ちゃんに話しかける。

「明日から僕は一人で暮らします」

「……………どうして?」

悲しそうな声で茅依ちゃんは言う。

驚いてはいないようだ。

僕の態度を見てある程度予想していたのかもしれない。

「言えませんが」

「……………そう」

それだけ言って会話は終わった。

横断歩道をもう少しで渡り終える時、横から音が聞こえてきた。

「っ!？」

僕の右側から車が猛スピードで突っ込んでくる。
このままだと僕にぶつかる。

僕は動けなかった。

恐怖で足がすくんだわけではない。

「思い……出した」

夢で見た光景。5年前の事。

僕が敬語で話す理由。

髪を隠した理由。

自分を偽った理由。

誰にも優しくされなくなかった理由。

誰にも大切にされなくなかった理由。

誰にも家に来て欲しくなかった理由。

そして、『燈加』の事。

車がすぐそこまで迫る。

僕はまだ動けない。

5年前、この後どうなったか分かっていながらも。

「危ないっ!!」

僕は突き飛ばされる。

それとほぼ同時くらいに何かがぶつかる音。そして更に大きな衝撃音。

「茅依……ちゃん？」

僕は起き上がって茅依ちゃんにフラフラと近づく。
その場所は交差点のほぼ真ん中。
赤く染まった場所。

周りからは悲鳴や大きな声がしているが、僕の耳にはほとんど届かない。

僕は茅依ちゃんの横に座り込む。

「ミー君…大丈夫…夫？」

笑って僕の頬を触る。

その手は血で濡れていた。

「うっ…うあっ…」

僕は泣いていた。

僕のせいだ。僕が……

「ミー…君。泣かないで……怪我…無くて…良かった……」

そのままずると手が落ちて、茅依ちゃんは目を閉じた。

「うわあああああああっつー!!」

僕は……同じ過ちを繰り返した。

第20話 2度目の過ち（後書き）

はい20話でした。

どうでしたか？

どうも上手く書けないこの頃。

というより最初からですが、より一層ですね。

ちゃんとまとまっているか心配です。

一応気を付けてはいますけどね。

頑張って書きます。

そういえば、アドレス変更のメールが来たら、確認しましたよ、
的なメールは返さないといけないのですか？
何年も携帯電話使ってた、最近知りましたよ。
もちろん今までは何も返してません。

だって何十、何百人にメールを送るのでさえ面倒で大変なのに、さ
らにその分返って来るんですよ？

ちよつと携帯から離れていて、いざ携帯を開いたら何百というメー
ルを受信しているんですよ。

怖いじゃないですか。

「分かりました」みたいなメールが何百通と来るんですよ。
もうホラーじゃないですか。

夜中中、携帯鳴り響きますよ。

寝不足になりますよ。

マナーモードにしても、朝には溜まってますよ。

それに確認しても誰から来たか分かったようでは分からないじゃないですか。

それじゃ意味ないじゃないですか。

という疑問がありました。

何か疑問に思ったら考えてしまいますね。

つい話が長くなります。

まあどうでもいいや、という結論に至りますけど。

今年も後1ヶ月ちよいですな。

はやいですねー。

今年の年末はのんびりしたいです。

去年は……もう散々でしたので。

それはもう思い出すのも嫌になるくらいですよ。

正月は親戚が集まるので楽しみですね。

もちろんお年玉という金銭的な期待もありますが、本命は従姉妹の

子どもですよ。

3歳くらいの男の子がいてこれがまた凄く可愛いんですよー。おやつを手で食べさせてあげたら、おやつを持って私に向かって手を突き出すんですよ。

「食べて？」みたいな感じで私を見るんですよ。もうやばいですね。

私にはそういう趣味は無いはずなのですが。それに今年妹も生まれたいらしいです。まだ見たことがないので楽しみですねー。

犬が欲しい。

小さくて可愛い犬が欲しいです。

モコモコのフワフワでトコトコ歩くコロコロの生物が欲しいです。やっぱり小さい生き物は良いですね。

癒されます。

でも子どもは何年かしたらひねくれるんですよ。

でも犬はそんな事ないですもんね。

犬万歳ですよ。

そんなわけで犬欲しいです。

ではでは今日もここまで。

また明日(・・・)ノシ

第21話 本当の自分

「う……」

目が覚めると病院だった。

全体的に白い色、消毒液の匂い。

なんでこんな所に……

「あ……」

思い出した。

僕が…僕のせいで茅依ちゃんが…

「あ、ミー君起きた？」

横を見ると椅子に座っている人がいた。

「燈加……」

「やっと思い出した？」

燈加が嬉しいような悲しいような顔をする。

「……ごめん」

僕は謝る。5年前の事を。

僕が犯した最初の過ちを。

「それは後にしてついてきなさい」

燈加が立ち上がって部屋から出て行く。

僕は慌てて追う。

燈加に連れられて別の病室に入る。

「茅依ちゃん!!」

僕は駆け寄る。

茅依ちゃんは頭と足、手、多分服の中も包帯を巻いているのだろう。痛々しい格好でいた。

「ミー君…無事で良かったねっ」

僕を見て笑顔になる。

それを見て僕は止まって俯いた。

僕にはそんな顔を向けられる資格がない。

「茅依ちゃん…ごめん。僕が…僕が………」

「誰にも心を開かなかつたらこんな事にはならなかった？だから本当の自分を隠して周りとは距離を置く？そうしたら誰からも助けられなくて周りは傷付かない？」

僕は顔を上げる。

茅依ちゃんはもう笑ってなかった。

真剣な眼で僕を見ていた。

「燈加さんから全部聞いたよ？」

僕は振り返って燈加を見る。

「ミー君は何も分かってない。心を閉ざして何になるの？私がミー君を恨んでるなんて思ってるの！？ミー君は自分から逃げただけ！向き合っのが怖くて嫌な事は忘れただけ！！私はそんな為にミー君を助けたんじゃないっ！！」

「燈加…」

「ミー君？私も一緒だよ？もしまたそんな事するなら許さないんだからっ」

後ろから茅依ちゃんも言う。

僕は……

5年前まで僕は普通の子供だった。

髪の色も隠さなければ、敬語も使わない男の子だった。

そして僕には毎日一緒に遊ぶ友達がいた。

それは燈加だった。

家に来てはゲームをし、父の料理を食べ、外に行っては暗くなるまで遊び通した。僕はありのままの自分をさらけ出していた。

燈加が僕を庇って事故にあうまでは。

その後、燈加は姿を見せなかった。

父は生きているとしか言わなかった。

僕は心を閉ざした。

大切な人が傷付くのが嫌だった。

髪を隠した。

敬語を使い出した。

出来るだけプライベートに近づけなかった。

上辺は友人を名乗っても心は開かなかった。

誰からも大切に思われぬように。

そして嫌な事は忘れた。

心を開いてはいけない。

という暗示と言ってもいい概念を残して。

全部思い出した今まで無意識に封じていた記憶。

「でもっ！！僕はっ！！」

僕にそんな資格はない。

こんな僕なんか生きる意味がない。

燈加にも茅依ちゃんにも顔向けできない。

「!?!」

突然後ろから抱きつかれた。

「ミー君」

茅依ちゃんの声が聞こえる。

「私は後悔してないよ？だって大好きなミー君を助けられたんだもん。ミー君は優しすぎるの。自分を犠牲にしてまで周りの人を大事にする人。ミー君、自分を大切にしたい？もう自分を傷付けるのは止めて」

「茅依ちゃん…」

「そうよミー君。ミー君はありのままのミー君でいいの。誰もミー君が心を閉ざす事なんて望んでない！！自分の為に生きて！！昔のミー君に戻ってよっ！！」

「燈加…」

2人とも泣いていた。

「僕は…もう…僕でいて良いの？」

僕の口から言葉が零れる。

敬語で偽られた言葉でなく、ありのままの僕の言葉。

「うん。ミー君はミー君のままだからミー君なんだよ」

「僕は…僕だから…僕？」

茅依ちゃんと言葉を繰り返す。

涙が幾粒も零れる。

僕は大声で泣いた。

「ミー君寝ちゃったね。可愛い」

「5年の間ずっと疲れてたのよ」

私は膝の上で寝ているミー君の髪を撫でる。

綺麗なアッシュブロンド。

やっと昔みたいに帰れるのね。

そう考えると涙がまた出てきそうになった。

5年前のあの後。私は海外のミー君のお母さんの所で世話になっていた。ミー君が不安定な状態な上に突然敬語を使い、事故の事も忘れてしまったからだ。

私がまた現れると錯乱して壊れてしまいかもしれない。

そんな危惧から私は姿を消した。

あの時は本当に泣いた。

一生分くらいの涙を使った気がした。

そして5年たった今、私は戻ってきた。

昔のミー君に戻って欲しかったから。

また昔みたいに過ごしたかったから。

おば様とおじ様は快く承諾してくれた。

ミー君をよろしく、と。

長かったね。

私はまた髪を撫でる。

「あつ！そうだった」

茅依さんがミー君の大きな鞆から2つの箱を取り出す。

「燈加さん誕生日おめでとう！！」

「あ…ありがとうございます？」

突然でびっくりした。

最近帰りが遅いと思ったらこんなの用意してくれたんだ。

「燈加さん開けてみて。大きい方が私なのっ」

茅依さんが飛びっきりの笑顔で楽しそうに言う。

「うん……わあっ！！可愛いっ」

中にはとても大きな猫のぬいぐるみが入っていた。どうやら手作りみたい。

「ありがとう。大事にするね」

「どういたしまして」

今度は照れくさそうに笑う。

茅依さんは表情が豊かで可愛いなあ。

「こっちはミー君の？」

私はもう一つの箱を指す。

「うん、そうだけど……開けちゃうっ？」

ミー君を一度見て茅依さんは言う。

「そうね。今日はミー君起きそうにないし」

時刻はすでに10時。

本来なら面会時間は終わってるけど、特別に許可を得ている。私はプレゼントを開ける。

中にはオルゴールのような物が入っていた。

「どう？ミー君頑張って作っ……燈加さん！？何で泣いてるの！？」

私は涙を抑えられなかった。

男の子と女の子が夕日の中、ブランコで遊んでいる光景。

ミー君と私がいつも遊んでいた光景。

夕日が街一番綺麗に見えた場所。

私たちのお気に入りの場所。

思い出の場所。

「ミー君、また一緒に行こうね」

第21話 本当の自分（後書き）

はい21話でしたー。

とりあえず一段落ですね。

一応、今回までで一章ということにしておきます。

次回から二章ですね。

まだはつきりと決まっておませんが、一段落ごとに章としてまとめていきます。

携帯なんでちょっと見苦しい目次になりそうですが（汗）

それはそうと、ちゃんとまとまっていたでしょうか。

今回の21話が一番まとまっているか心配です。

一章の一番大事なところなので。

とても心配なところです。

うまくかけてることを祈ります。

さて区切りの良いところでSSを書きました。

言っておきます。

サイアーリー
SSではありませんよ。

S（鈴木（仮））^{ストーリー}Sです（笑）

中身はそのままです。

主人公は鈴木（仮）です。

鈴木が日常が書かれているかもしれませんが、書かれていないかもしれません。

ともかく鈴木（仮）視点です。

ちなみに、ぶち壊しです。

今章一番の話をぶち壊します。

まるで神を浄化し、魔を倒すような名前の人右手のようにぶち壊します。

あえてこのタイミングで出します。

明日も出します。

2日連続で出します。

不定期に出し続けます。

もしかしたらそのうち本名が分かるかもしれませんが、分からないかもしれません。

期待しないでください。

鈴木（仮）の設定が少し分かります。

それだけは言えます。

鈴木（仮）は鈴木（仮）だから鈴木（仮）なんだ！！
もうぶち壊しですね。

すみません。

そんなわけで興味のある方は読んで下さい。

無い方はご注意下さい。

ではこのくらいで。

縁があれば次話（SS）で会いましょう）・・・（ノシ

〈SS 1〉(前書き)

サイドストーリー？

いえ鈴木(仮)ストーリーです。

あえてこのタイミングで出します。
ご注意ください。

皆さんおはようございます。

僕は2 Bの「やあ、ミリー」という者です。HR前なので周りはおちよつとうるさいですね。聞こえなかった人の為にもう一度。

僕の名前は「相変わらずミリーは可愛いなあ」
分かりましたね？

ここ大事ですよ。
重要なキャラですから

さて、今日は転入生が来るみたいですね。
どんな人が楽しみです。

「はいはいみんな席着いてー」

担任の島田真美26歳彼氏いない歴26年が現れました。

「HR始める前に転入生を紹介するわよー」

やっぱりいましたね。転入生。
教室がざわついています。

僕ぐらいしか知らなかったのではないのでしょうか。
僕の趣味の情報収集は伊達ではありませんよ。
む。稲嶺来くん。

顔色ひとつ変えていませんね。
知っていたのでしょうか。

生徒の中ではこの学校の『教頭』の子である僕しか知らないはずな

のに。
いったいどんな情報網を……

稲嶺来人は教頭を脅していいように使ってます。（第1話、第5話等参照）

「「「おおーっ！」「」
「「「キヤーツ！」「」

ん！？転入生が入ってきたようですね。

男子も女子も騒いでいるという事は美女なんでしょう。
どれどれ。

んー、確かに綺麗な方ですねー。

でも僕としては可愛い子の方が好みなんですネ。
左隣の雪村さんみたいだねっ。

もう興味が無いので読書でもしていきましょう。

「すみません。ちょっと良いでしょうか？」

ん？転入生の人？

何で僕の前に立っているのでしょうか。

「どうしました？」

僕は優しく聞きます。紳士ですから！

「席を譲っていただきたいのですが」

「断るっ！！」

はっ、ついムキになってしまった。

でもこの席は譲れない。

この席を取るために、僕は朝の7時から教室にスタンバイ。

雪村さんはいつもギリギリに来るのが分かっているため、仲の良い神崎君の隣に来ると想定。

神崎君が良い場所に座るように祈りに祈って得たこの席だ。誰にも譲るわけには行かない！

「駄目……ですか？そうですよ。いきなりこんな事言われても迷惑ですよ」

ちよつと。泣かないでくださいよ。

そんなことしたら僕が悪者じゃないですか。

「てめえ、泣かすんじゃないよ！！」

「席くらい代わってやりなよ」「最低っ！！」「君」

「死ね！」「君代わった方が良いと思うよ」

「代われ代われ（笑）」

「ほらどけよ！」

「ていうか地べたに座れ！」

「そうだ」「甲斐性なし」「君にはお似合いだ（笑）」

だいたい何で屋上を使っているんですか!!
誰がいつたい鍵を貸し与えているんですか!!

稲嶺来人が教頭を脅して鍵を使っています(第1話参照)

……言っても仕方が無いのでおとなしく購買のパンでも食べましょう。

あれはあれで中々美味しいものです。

うわっ、並んでますね。

とりあえず後ろに並びますか。最後尾ですか。
間に合うと良いのですが。

「ポン」

ん? 誰ですか肩に手をおくのは。

まさか!? 雪村さん!?

僕のために昼食を用意してく「おい、邪魔だ」

「ひいつ!? 間宮さん!？」

僕は大きく情けない声を出してしまいました。

途端に周りがざわつきます。

ちよつと押さないでください。

足を踏まないでください。

殴らな「ぶぎゃっ!？」

「はっ!?!」

「ここは?購買前?

「どうやら気絶してたみたいですね。

「顔が痛いです。凄く痛いです。」

「まあともあれ人だからも無くなってパンが買えそうです。」

「おばちゃん。コロッケパンください」

「放課後は販売しないよ」

「……………」

「お腹空いたなあ。」

〈SS 1〉(後書き)

はい鈴木(仮)ストーリーでしたー
いかがでしたか？

明日も更新しますよー。

その後は不定期で出すつもりですよー。

あれですね、キーワードの鈴木(仮)は伊達じゃないですね。

鈴木(仮)はサブキャラ扱いで良いのでしょうか？

ー 楽しく書いてます(笑)

こういうキャラ大好きです。

ネタキャラってやつですか？

大好きですね。

繰り返して言います。

大好きですね。

ところで鈴木(仮)の名前どうしますかね。

ぶっちゃけたら、まだ決めてないのです。

まあ当分出す予定もないので、じっくり考えて行きましょうか。

出す予定があればの話ですが。

そろそろ他のキャラが出てきますかね？

第22話では1人モブキャラの名前が出ますけど。

サブキャラにジョブチェンジ出来るのでしょうか。
モブキャラのレベルを上げ続けるのでしょうか。
まあどっちでもいいですが。

所詮都合のいいキャラな程度なので。

今更ながらこの小説、登場キャラが少ないような気がします。
ほんとに今更ですが。
何とかしなければ。

とは言えこの小説はこれから、言わば今までの話はプロローグに過ぎないので大丈夫だと思います。
いくらでも修正が効きます。

学校関係なんかほとんどノータッチなんでも都合のいいように変えられますよ。はははは。

と言っわけで考えます。

ちゃんとした話になるように。

この後はかなりアバウトな考えしかないので、早めの対策が必要ですね。

とは言っても、行き当たりばったりで今までだったので、大まかな方針があれば大丈夫！……………な気がします。するだけです。

数少ない読書様に怒られない、見放されないように頑張ります。
では今日はこれにて(・・・)(ノシ

第22話 本当の姿で

「今日は良い天気ね」

燈加が校門の前で大きく伸びをする。

「それは良いんだけど、何だか視線が気になるよ」

周りの生徒は僕の事をすれ違い様に、遠巻きに、後ろからと見てくる。

「仕方ないわよ。その頭じゃね」

「昔はこんな反応されなかったのに」

僕は涙目で言う。

僕は今ウィッグを被っていない。

つまりアッシュブロンドの髪がそのまま出て肩まで伸びている。そのためかみんなにジロジロと好奇心な目や奇異な目で見られる。しばらくは我慢かな。

「おい、あの娘誰だよ」

「可愛いなあー転校生かなー」

「転校生は柊だろ」

「持ち帰りたいなあ」

「どっちもアリだな」

「むしろ両方欲しい」

……し、しばらくは我慢かな。

ていうか僕男なんだけど。

「おっはよー、柊っちー」

「おはよう神崎君」

燈加が教室に入ると心の声が聞こえる。

僕は燈加の後に続いて入る。

「おっはよ……………えっと、転校生ー？」

心が困った顔をする。

やっぱり分からないもんなのかな。

教室にいたクラスメートも心の大きな声で僕に気付く。

「おはよう心」

僕は自分の席、つまり心の右隣に座る。

燈加も僕の右隣の自分の席に座る。

「え？」

「まだ分からないの？」

やがて担任の島田先生が入って来る。
クラスメートは文句言いながらも席に座る。

「ちょっと、そのの……なんていう名前だっけ？」「……知りません」
「……とにかく邪魔だから何とかして」

島田先生の指示で横溝君によって自分の席へと引きずられる鈴木（仮）君。

大半の生徒が即答する上に、担任でさえも知らないなんて。

「じゃあHRを始め……る前に雪村君。その頭は何ですか？」

「地毛です」

「地毛なら良いわ。じゃあHRを始めます」

地毛なら良いんだ。

まあ、前ですつと寝ている金髪の凌でさえ地毛で通ってるんだけど。
普通に染めてるけど。

HRでは主に茅依ちゃんの話題だった。

交通事故にあったこと。

来週には学校に来れそうな事。

先生よりも燈加よりの方が詳しいようだった。

「あ、起きた？」

目を覚ますとすぐに燈加の声がした。

僕の布団に入って隣にいた。

場所は自分の部屋。

時刻は朝の6時30分頃。

「…おはよう」

「おはよう」

体を起こして僕が目を擦りながら挨拶すると笑って燈加が返す。

「あれ？そういえばなんで自分の部屋にいらんだろっ」

確か病室で泣き疲れて寝ちゃった気がする。

燈加も体を起こして隣に座る

「私が運んで来たのよ」

「燈加が!？」

「ミー君軽いから結構楽だったわよ」

「……小さくて悪かったね」

「ごめんごめん」

「別に気にしてないけどね。運んでくれてありがとう」

「ふふっ」

突然燈加が笑い出す。

「な、何？」

「うっん。やっとミー君が戻ってくれた、って思っ」

「あ……ごめん」

「もついいのよ」

そう言っ僕を抱きしめてくれる。

暖かくて、優しくて、思いやりがあっ、まるで母親のようだ。

「うっ」

僕はしばらくそのままだった。

「茅依ちゃんだけどね、そんなにケガもひどくなくて日曜日には退院できるみたい。といってもしばらく包帯は巻くみただけ。あつ、傷は全然残らないだっ。私みたいになっ」

最後は笑っ言っ。

そっいえば前に見てしまっ時も全然気づかなかっし。

「そうなんだ。良かった」

僕はほっと息を付く。

昨日は元気そうに接してくれていたけど、大丈夫そうで本当に良かった。

「だから日曜日迎えに行こうね。学校終わった後にもお見舞いにね」

「うん。病室って退屈そうだしね」

今日は木曜日だから後3日か。

茅依ちゃんにまたちゃんとと言わなきゃ。

謝罪と感謝の両方を。

「あと、ミー君」

「何？」

燈加さんが泣きそうな顔で笑いながら言う。

「誕生日プレゼントありがとう」

「何で隠してたかなー」

「う、ごめん」

昼休み。屋上にて玲に説教されている。

心たちは購買に昼食（僕のも）買いに行つて、僕は玲に先に連れてかれてる。

少し離れた所で燈加がクスクスと笑っている。

「全く別人じゃんかー。髪の毛も喋り方も違うし」

「ごめんなさい」

「昨日のは一体何なのさー。みんな心配したんだぞっ」

「ごめんなさい」

僕は下を向いてずっと謝りっぱなしだ。

「だいたい何で下向いてんだよっ」

「……ごめん」

僕は少し顔を上げて目で玲をみる。

「うっ！その顔は反則……」

「？」

玲が何故か顔を赤くしている。

「良いからこつち見るなー」

どうすれば良いんだろう。

燈加を見たらさつき以上に笑つ……ニヤニヤしていた。

「おつまつたせ〜」

少しして心が手にパンを持って来る。
その後ろに来人が付いてくる。

「ありがとう。凌は？」

僕は心からパンを貰って尋ねる。

「トイレだ。先に食っていよう」すると来人が答える。
僕たちは食べ始めた。

「しっかし驚いたねえー。ミリーがいきなりこんなだもんなー」

「さすがに朝は驚いた」

「ははは、ごめん」

「柊っちは知ってたんだよなー？」

「ええ、知ってたわ。だって私たちどう……」

「いとこだからね」

僕は燈加の話を遮る。

絶対今『同棲』って言おうとしたでしょ!?

「まあでもいいんじゃないか?」

「来人、気にしないでくれるの?」

「別に気にすることはないだろう。どんなんでもミリーはミリーだからな」

来人が大したことはないといったように答える。

僕は僕……か。

茅依ちゃんのことを思い出す。

うん、僕は僕だから僕なんだ。

「俺も気にしてないよっ。玲もそうだろう?」

「まあね」

心の言葉に玲は横を向いて答える。

「みんなありがとう」

僕は感謝の気持ちを言った。

素直な気持ち。偽りのない気持ち。

「茅依もすぐ受け入れると思うよ」

照れくさそうに玲が言う。

「あら？茅依さんは知ってるわよ」

燈加さんがさらっと返す。

「やっぱり納得できな～い!!」

玲がふざけて暴れる。

僕たちはみんな笑っている。

良かったみんな受け入れてくれて。

「あー、待たせたな」

入り口から不意に凌が現れる。

僕らは動きが止まる。

「あ？どうしたんだよ。全員して固まって。ん？その変な頭の誰だよ。転校生か？……て、おい誰か反応しろよ。おいっ！」

僕たちは大爆笑した。

心の底から、気持ちに素直に。

ごめん凌。ずっと寝てたから忘れていたよ。

僕は心の中で謝った（笑）

第22話 本当の姿で（後書き）

はい22話でした。

SSの2話も投稿したので見てくださいね。

また体調が悪いです。

しかもバイト中に急変する始末です。

もう立つのもきついくらい頭痛と吐き気がしてひどいです。

今は横になってるので少しマシです。

早く寝たいですね。

予約投稿を同じ時間にすると順不同で投稿されるらしいです。

今回は先にこつちを読まないといけないので日付が変わったらSSをすぐに投稿します。

なので後1時間半寝れません。

まだ10時30分なので。

何でこんな時に限って2話も投稿するなんて言ったんでしょうか。
あーあ。

さて帰宅するのもしんどかったのですが。

今日は星が凄く綺麗でした。

オリオン座ばっちり見えましたよ。

自宅のある通りまで来たら、家のある方向の道の真ん前にありましたよ。

一瞬だけ気が紛れましたね。一瞬だけ。

星は良いですね。

癒されます。

普段なら自宅に戻らず天体観測するのですが。

その辺のベンチで。

今日はそんな余裕なんかかったです。

残念です。

午前二時に踏み切りに望遠鏡担いで行きますよ。

あ、この辺に踏み切りありませんでした。

望遠鏡も持ってませんでした。

そういえば、出ましたね。横溝君。

初めてモブキャラに名前がつかまりました。

横溝君……どんなキャラになるのでしょうか。

創作意欲に駆られますね。

ランクとしてはモブ以上鈴木（仮）以下ってところでしょうね。

ぼちぼち作者に使われていくでしょう。

使い道があればですが。

「これは、このようにおもしろい。
それでは（・・・）シ」

〈SS 2〉 (前書き)

必ず第22話を読んでから読みましょう。

こんばんは。

僕が誰だか分かりますね。

僕の名前は「横溝」帰るぞ〜」

今は放課後です。

生徒が朝以上にうるさいですね。

と言ってももう何人かしかいませんが。

雪村さんはいますけどねっ!!

むしろ雪村さんがいますからね!!

で、何をしているのかと言うと、雪村さん観させ……「ホン。

雪村さんが何をしているのを見ていただけです。

ん？桐生さんと話してますね。

2人とも声が小さくて良く聞こえません。

何々？聞こえる単語は…

『誕生日』『プレゼント』『手作り』

キターーーーーー(。°)-----!!!!!!

雪村さん!!

感激です。

僕の誕生日が5月1日だったこと知ってたんですね!?

ありがとうございます!!

嬉しくて何か知りませんが鼻血が止まりません。

うっ、出血多量で倒れそう。

でも何をくれるのか気になる。
でも当日のサプライズもなくなるし。
しばらく大人しくしていきましょう。

・・・誕生日前日（4月30日）

今日は気分がいいなあ。

何たって明日は……ふふふ、ふへふへ。
おっと！変な笑いになってましたね。
危ない危ない。

とにかく良い気分ですよ。

あ！？あれは雪村さん。

今日は元気良く挨拶するぞー！

「おはようございますー！」

「…おはようございます」

あれ！？何だか元気が無いというか、冷たい！？
どうして！？

僕が何かした……ああ！なるほど。

明日の事が照れ臭くて、ついそんな態度を取ってしまうんですね。

つい手を叩いちゃいましたよ。
僕はなんて冴えているんだろうか。
まったく、雪村さんは可愛いなあ。
まあ明日までそっとしといてあげましょう。

・・・誕生日当日（5月1日）

そわそわそわそわそわそわそわそわそわ。
いやー楽しみですねー。

楽しすぎて一睡もしてない上に朝の4時くらいに登校しちゃいましたよ。

あははははー。

それにしても雪村さん遅いなあ。

もう6時30分過ぎですよ。

何をしてるのでしょうか。

「誕生日プレゼントありがとう」

なんて言われているところを想像しているのかもしれない。
うわー可愛いやつめー!!

二時間後。

「僕と付き合っ…へぶしっ!?!」

ああ、目の前が真っ暗に。

「……きて。起きて」

誰かが僕を呼んでいる。
目をうつすらと開ける。
人影が見える。

もしかして雪村さん?
雪村さん!?

「雪村さん!!」

僕は抱きついた。

もう離さない!!

君からの誕生日プレゼントは確かに受け取ったよ!!

「寝ぼけてねえでさっさと帰んな」

「……………はっ?」

僕は恐る恐る離れる。

「……おはようございます。用務員さん」

「もうとっくに放課後だよ。ほらさっさと帰った帰った」

「はい」

僕はトボトボと歩き出す。

もう夕日が沈みかけている。

雪村さん……

もう帰っただろうか。

ん？前から女子生徒が2人歩いて来る。

忘れ物でもしたのだろうか。

2人は何やら会話している。

「昨日転入生の柊さん、誕生日だったんだってさー」

「へえー。じゃあ雪村君と桐生さんが最近作ってたのって誕生日プレゼントだったんだね」

「そうみたいよ。私も早く誕生日来ないかなあ」

「はははははっ」

女子生徒たちはそのまま去っていく。

僕は玄関に向かって再びトボトボと歩く。

お腹空いたなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3296y/>

僕は僕だから僕なんだ

2011年11月27日00時52分発行